

## 第3章 調査の成果

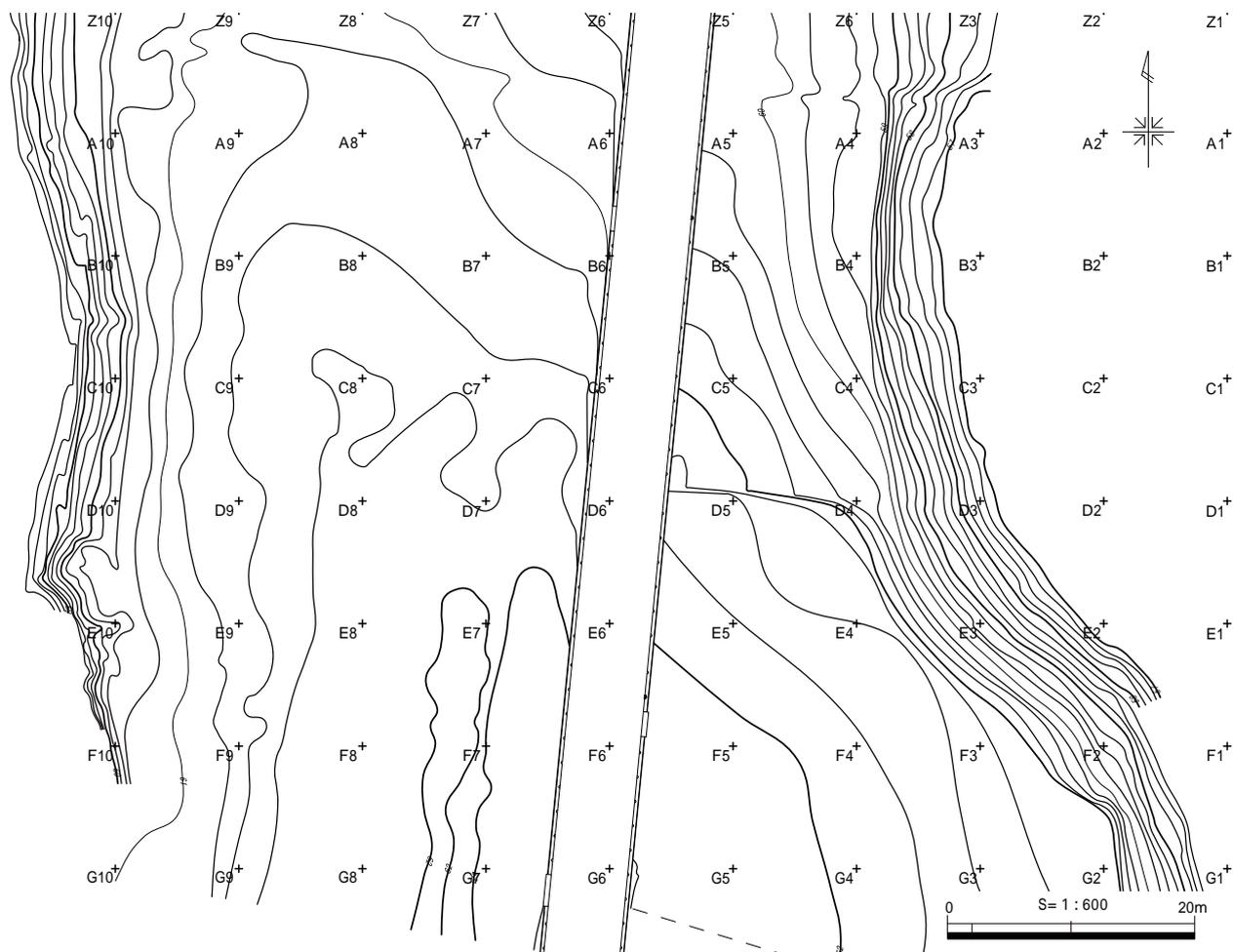
### 第1節 遺跡の立地と層序（第5～7図）

笹津乳母ヶ谷第2遺跡は大山の裾野に派生する標高約59m～62mの丘陵上に位置する。本遺跡一帯の丘陵は、古期大山の噴出物からなる溝口凝灰角礫岩の上に新期大山からの降下テフラが累積して形成された台地状の地形である。遺跡の東側には黒川、勝田川が流れ、周辺にはこれらの川によって形成された沖積平野が広がっている。この沖積平野と本遺跡との比高差は約35mである。

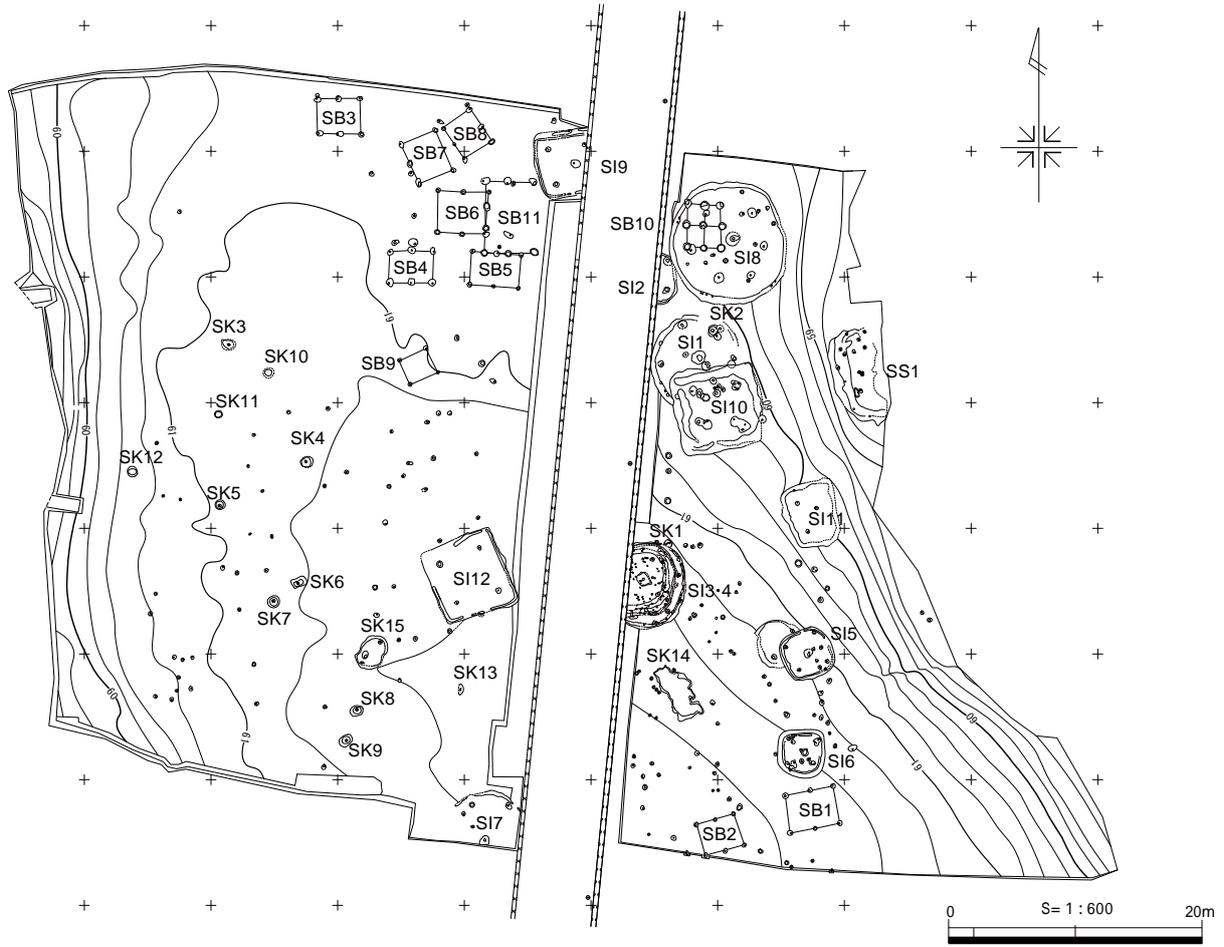
調査地の大部分は畑地であったが、かつて果樹園として利用され、一部植林も行われていた。町道東側に位置する1区は、本来の傾斜地形に耕作地確保のため東側の斜面上部に盛土を施し、平坦面を作り出した様子が窺えた。これらのことから果樹園耕作に伴う攪乱と併せ、遺構の多くが削平を受けていることが予測された。

土層堆積状況は上から、表土層、客土、暗褐色土層、黄褐色土層（ホーキ・AT層）、黄白色粘質土層、淡赤褐色粘質土層（ハードローム層）である。1区は～層までの堆積が浅く、表土剥ぎを実施した結果、層上面で各遺構を検出した。2区は～層の堆積に加え果樹園整備に伴う掘削が著しく、縦横に耕作痕が広がる状況が確認された。耕作痕の深度は様々であり、

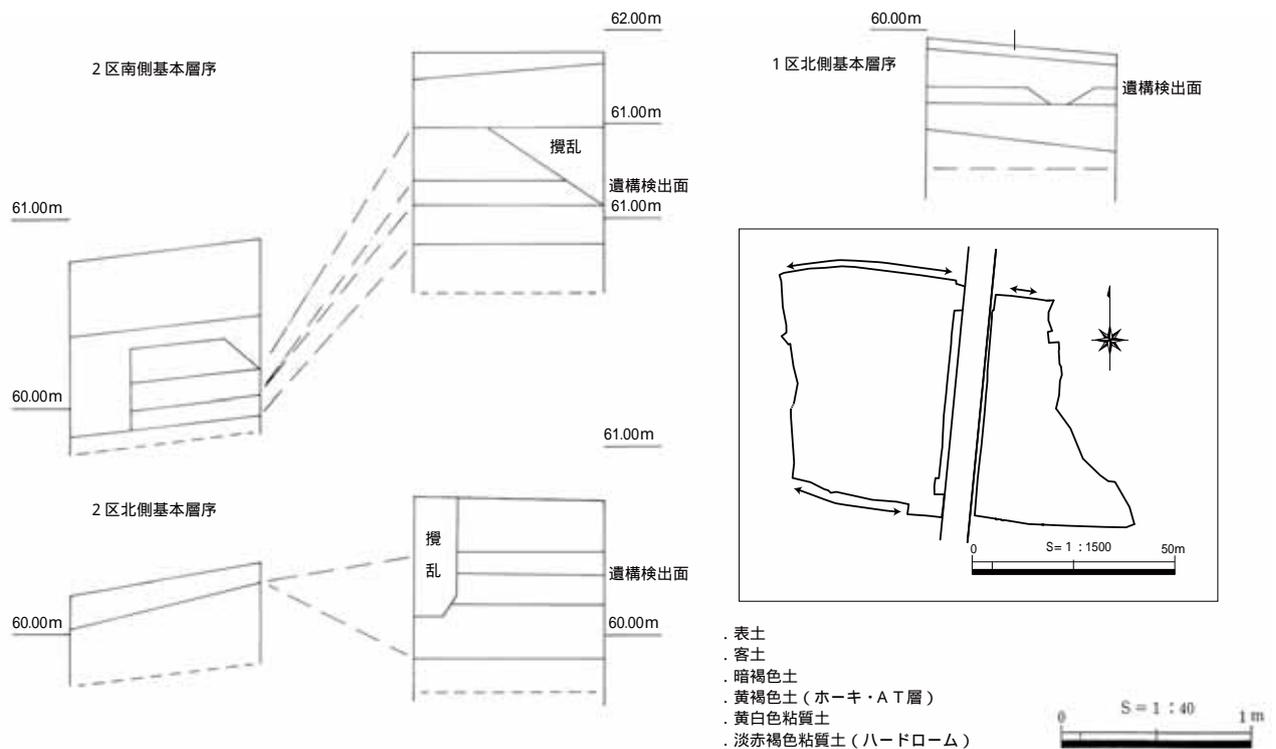
層以下にまでおよぶものもある。後述するように弥生時代後期後葉、古墳時代前期前半、後期中葉の遺構を同一面で検出しており、本来の遺構面はさらに上部にあったものと推定される。（大川）



第5図 調査前地形測量図



第6図 調査後地形測量図



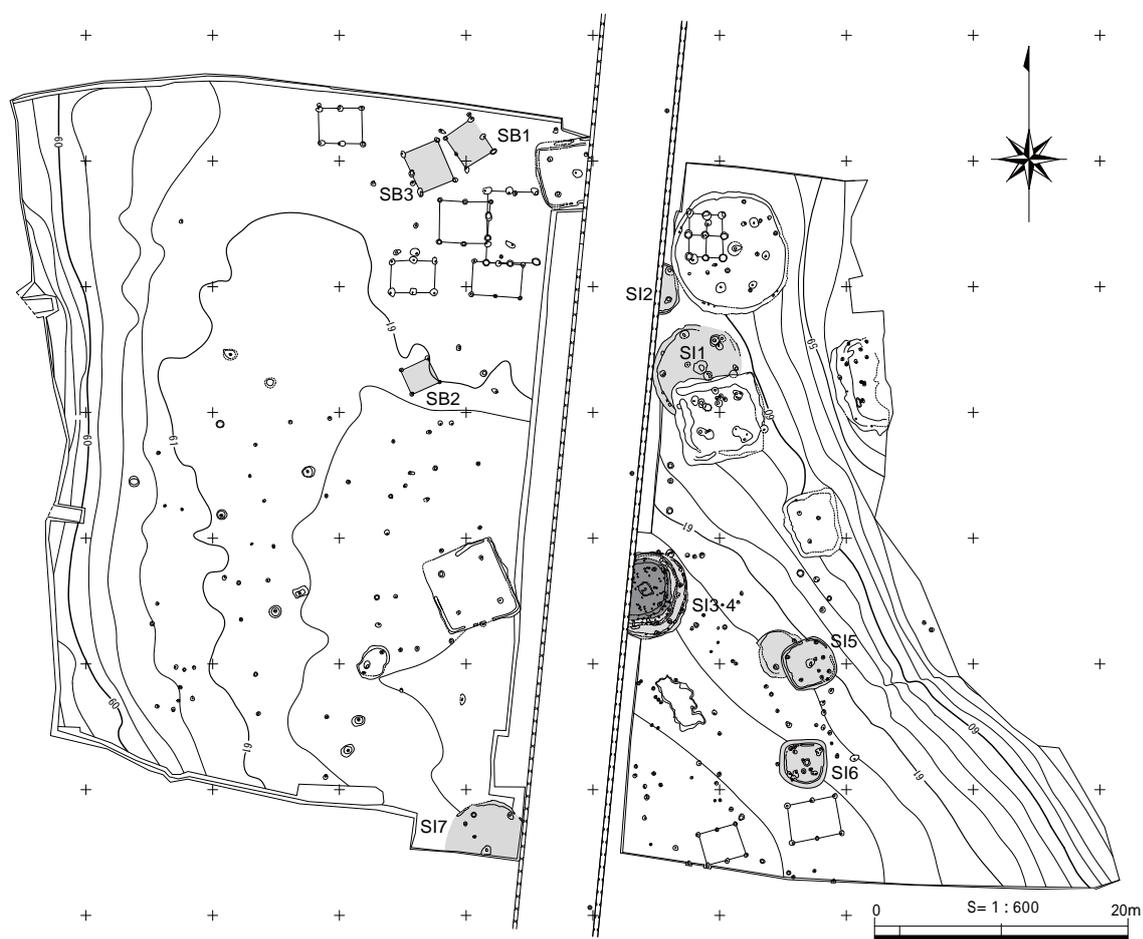
第7図 調査区基本土層図

## 第2節 弥生時代の調査成果

## 概要

調査地内では竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡3棟を確認した。竪穴住居跡は平坦面全体に分布するのではなく、調査地の東側に分布の偏りが認められる。SI3は、少なくとも2回の建替えが行われた後焼失した竪穴住居跡である。また焼失住居を含めた3棟の住居跡は調査地中央を南北に横断する町道下にまで及んでいることが確認された。掘立柱建物跡は調査区の中央から北側に位置する。これらの遺構からは土器、石器、鉄器が出土しており、それらから弥生時代後期後葉を中心とした時期のものであることが考えられる。竪穴住居跡のうちいくつかは同時併存していたと思われる。掘立柱建物跡は少なくともこの時期以降に埋没したものである。

遺構検出は層上面で行っており、古墳時代以降に構築された遺構や近現代に行われた耕作による攪乱や土地改変に伴う盛土により、本来の遺構面は大きく掘削されている。(大川)

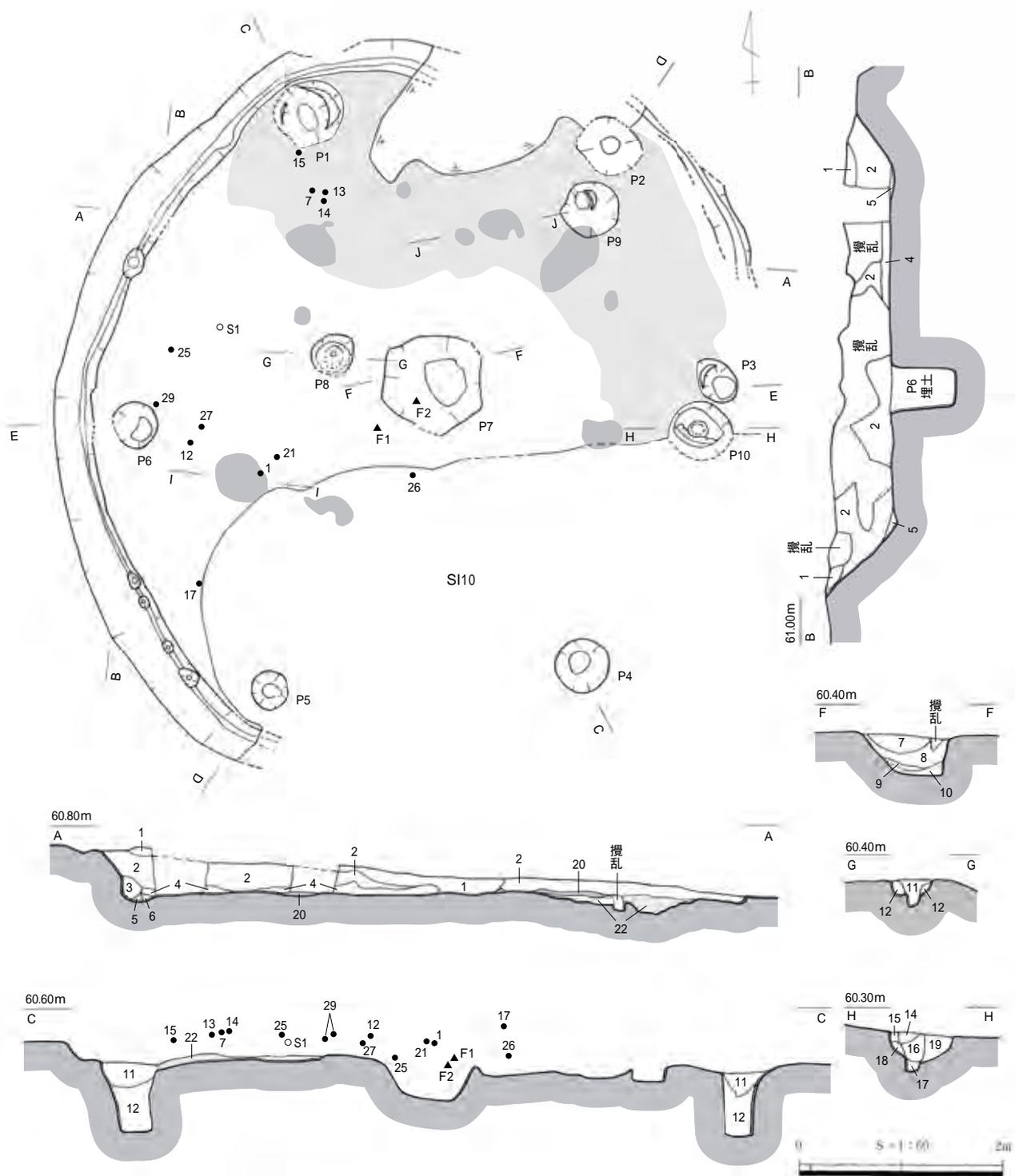


第8図 弥生時代の遺構配置図

## 竪穴住居跡

SI1 (第9～12図, PL. 4, 23, 24, 25, 40, 42, 44)

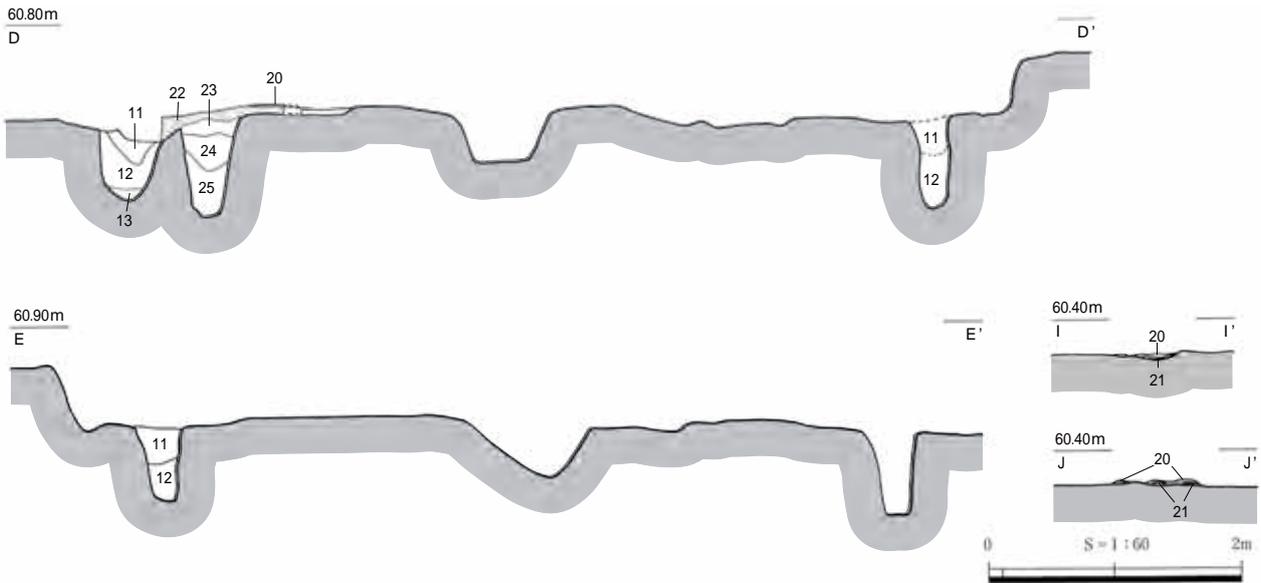
調査地の北東、1区C 4～5グリッド、東側斜面地との傾斜変換付近、標高約60.1～60.6mに位置する。形態は円形で東西、南北とも約7mの規模を測る。南半部は古墳時代後期中葉の竪穴住居跡



SI 1

- |  |   |
|--|---|
| <p>1. 暗褐色土 (粘性ややあり、しまり悪い、微細炭化物を含む)</p> <p>2. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、3 cm以下のホーキブロックを含む)</p> <p>3. 暗褐色土 (粘性あり、しまり悪い、1 cm以下の炭化物を含む)</p> <p>4. 暗褐色土 (粘性あり、しまりよい)</p> <p>5. 暗黄褐色土 (粘性あり、しまりよい)</p> <p>6. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、ロームブロックを含む)</p> <p>7. 暗褐色土 (粘性あり、しまり悪い、1 cm以下の炭化物を含む)</p> <p>8. 暗褐色土 (粘性あり、しまりよい、1 cm以下のホーキブロック、微細炭化物を含む)</p> <p>9. 暗褐色土 (粘性あり、しまり悪い、やや黒味を帯びる)</p> <p>10. 黄褐色土 (粘性あり、しまり強い、微細炭化物を含む)</p> <p>11. 暗褐色土 (粘性あり、しまりあり、2 cm以下のホーキブロックをマール状に含む)</p> <p>12. 暗褐色土 (粘性あり、しまりあり、2 cm以下のホーキブロック、微細炭化物を含む)</p> <p>13. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、微細炭化物を含む)</p> | <p>14. 黒褐色土 (粘性ややあり、しまりあり、2 cm以下のホーキブロックをまだらに含む)</p> <p>15. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい)</p> <p>16. 暗褐色土 (粘性あり、しまりよい、ホーキブロック、微細炭化物を含む)</p> <p>17. 暗褐色土 (粘性あり、しまりよい)</p> <p>18. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、やや黒味を帯びる)</p> <p>19. 黒褐色土 (粘性あり、しまりよい、2 cm以下のホーキブロックを含む)</p> <p>20. 赤褐色土 (粘性なし、しまりよい)</p> <p>21. 暗赤褐色土 (粘性なし、しまりよい)</p> <p>22. 暗黄褐色土 (粘性ややあり、しまりよい、5 cm以下のホーキブロックを含む)</p> <p>23. 黒褐色土 (粘性あり、しまり悪い、ロームブロックを含む)</p> <p>24. 暗黄褐色土 (粘性あり、しまり悪い)</p> <p>25. 暗黄灰褐色土 (粘性あり、しまり悪い)</p> |
|--|---|

第9図 SI1

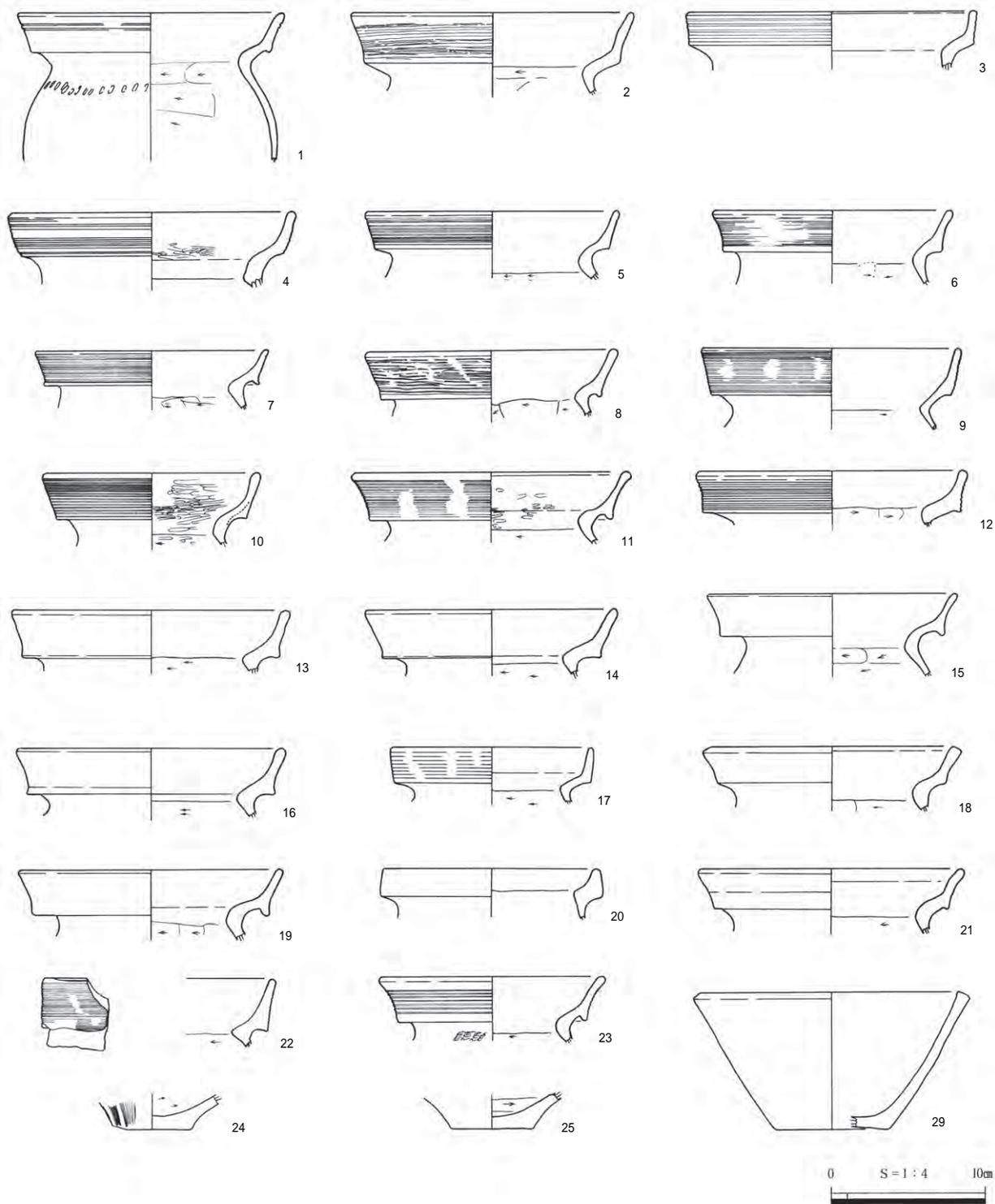


第10図 SI1

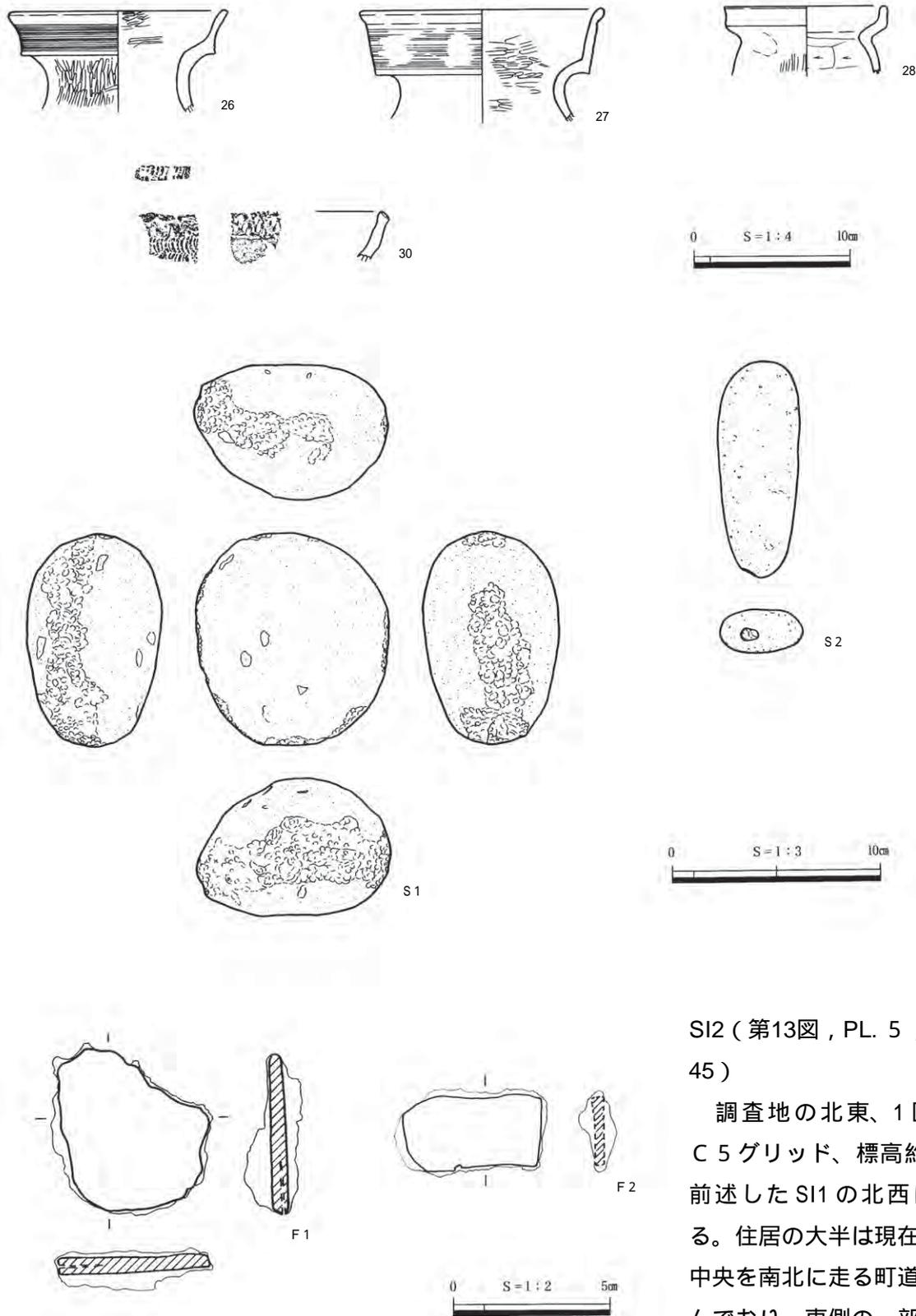
SI10によって埋土、床面を削平されており、北、東辺には耕作に伴う攪乱が認められる。住居中央部は事前に行われた試掘トレンチにより埋土が失われていた。壁高は住居北、西側で約50cm、東側で約10cmの高さを測る。床面の標高は約60.0mを測り、床面の面積は22m<sup>2</sup>以上と推定される。周溝は幅約15cm、深さ約10cmで全周するものと推定されるが、周溝の東半部は耕作に伴う攪乱や、後世の遺構によって削平を受けており、一部を確認したのみであった。西側の周溝内には深さ10cm以下の浅い凹みが5ヶ所認められたが、掘り込みが浅いため用途は不明である。住居床面は層を掘り込んで形成されており、北半部を中心に約5.3m×2.2mの範囲で約10cmの厚さを測る貼床(22層)が施されている。柱穴等のピットは10基を確認している。そのうちP1～6が支柱穴、P7が中央ピットと推定される。P1(68×64-72)cm、P2(68×52-72)cm、P3(52×40-68)cm、P4(56×55-72)cm、P5(40×40-76)cm、P6(48×48-68)cmを測る。掘り込みの状況から当住居跡は6本柱の住居と考えられる。P2の南側に位置するP9は貼床を除去した段階で検出されたものであり、P9-P2へと部分的に柱の建替えが行われていたことが窺える。そのほか住居床面で確認したP10は試掘トレンチ内の埋め戻し土を除去した段階で検出した。これらのピットは支柱穴P1～6に比べて掘り込みが浅く、埋土の状況も異なることから、住居に伴わない可能性があり、住居埋没後に掘り込まれたものと考えられる。焼土面は住居の北半で9ヶ所を確認しており、そのうちの2ヶ所の焼土面には赤褐色、暗赤褐色と2層にわたる埋土の堆積状況が認められた(I-I'、J-J')。

埋土中から土器片、石器、鉄器が出土した(第11、12図)。ほとんどの遺物が住居埋土中から出土したものであり、1～23が甕の口縁部、24、25が底部片、26、27が壺、29が鉢である。床面直上から甕(16)、壺(27)の破片が出土した。石器としては敲石(S1)、剥離痕のある礫(S2)がある。不整形の板状鉄製品(F1)、板状の不明鉄器片(F2)は中央ピットの埋土(7層)から出土したものである。またP6の埋土から出土した炭化物にはモモ核が含まれていた(第4章第2節)。30は縄文前期末～中期初頭の土器片であり、埋土中に流れ込んだものと考えられる。

この竪穴住居の時期は、床面付近から出土した土器の特徴が、概ね清水編年の3様式期に相当することから、弥生時代後期後葉の時期が充てられる。(大川)



第11図 SI1出土遺物



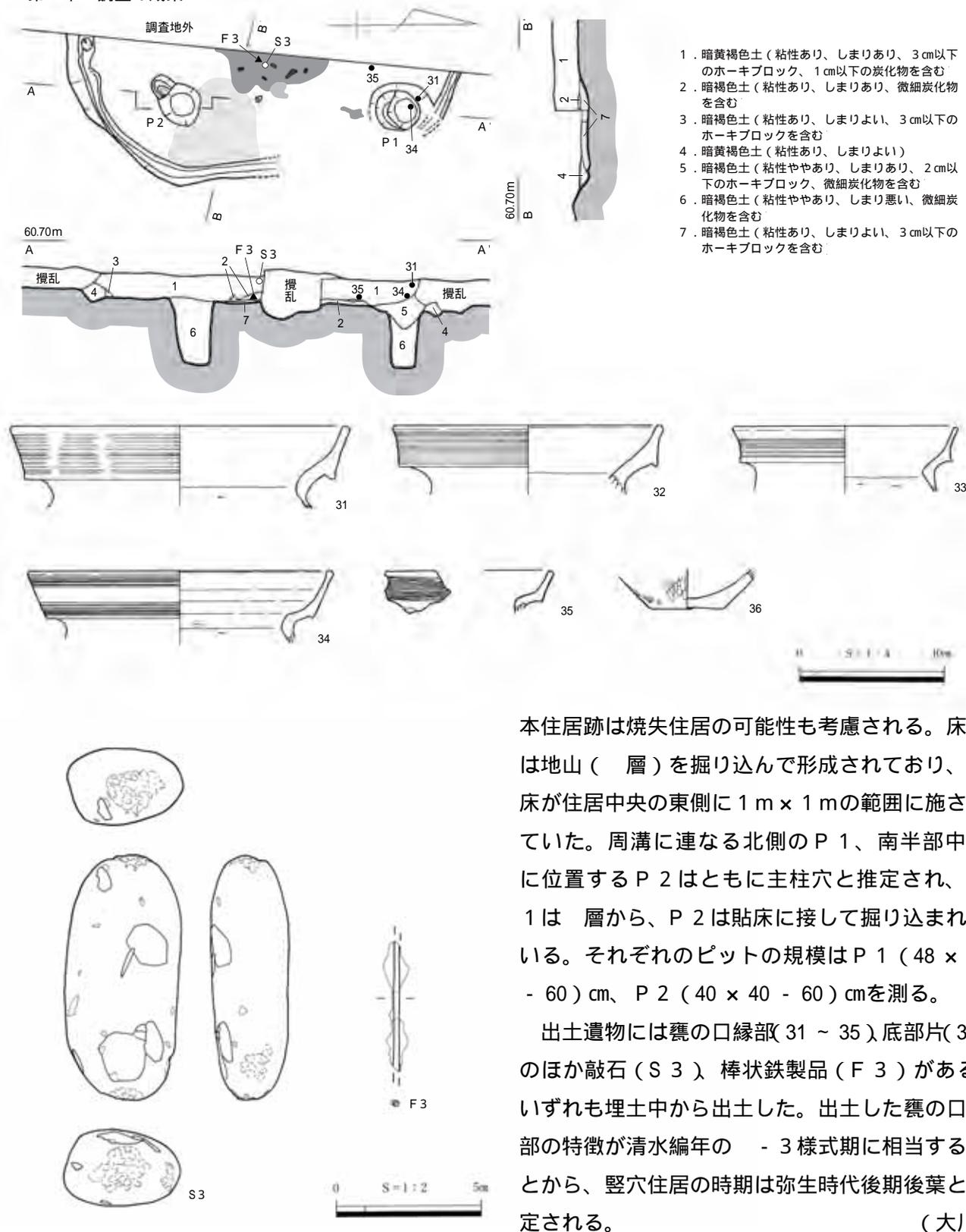
第12図 S11出土遺物

作痕跡や、攪乱による削平が著しい。住居規模は現況で南北約4.6mを測るが、東西の規模は不明である。床面の標高は約60.0mを測る。形態は隅丸方形または円形と推定され、床面積は3.3㎡以上である。住居中央部に約1.2m×0.45m、厚さ約5cmの炭化物層の広がりや部分的に焼土ブロックが認められた。遺存状況は良くないが、一部炭化材が出土している。西半部の埋土の状況は不明であるが、

S12 (第13図, PL. 5, 25, 42, 45)

調査地の北東、1区B5～C5グリッド、標高約60.2m、前述したS11の北西に位置する。住居の大半は現在、調査地中央を南北に走る町道の下に及んでおり、東側の一部を検出した。北東隅は果樹栽培に伴う耕

第3章 調査の成果



本住居跡は焼失住居の可能性も考慮される。床面は地山（層）を掘り込んで形成されており、貼床が住居中央の東側に1m×1mの範囲に施されていた。周溝に連なる北側のP1、南半部中央に位置するP2はともに主柱穴と推定され、P1は層から、P2は貼床に接して掘り込まれている。それぞれのピットの規模はP1（48×40 - 60）cm、P2（40×40 - 60）cmを測る。

出土遺物には甕の口縁部（31～35）底部片（36）のほか敲石（S3）棒状鉄製品（F3）がある。いずれも埋土中から出土した。出土した甕の口縁部の特徴が清水編年の - 3 様式期に相当することから、竪穴住居の時期は弥生時代後期後葉と想定される。（大川）

第13図 SI2および出土遺物

SI3, 4（第14～21図，巻頭図版3～5，PL. 6～9，26，41～45）

調査地の中央、1区E5グリッド、標高約61.5～61.6mに位置し、2棟の住居が切りあった状況で検出された。埋土の切りあい関係からSI4 SI3の新旧関係となる。いずれも地山（層）上面で検出した。

最初にSI4が建てられる。SI4は周溝や柱穴の配置から同じ床面で少なくとも2回の建て替えが行

われている。建替え以前の住居埋土（54層等）は周辺に分布する他の住居と類似した暗褐色土であるが、建て替え後の埋土に相当する46層、47層は赤褐色、灰褐色を呈するものであり、地山である～層と土質、色調が類似している。

その後、SI3が建てられる。SI3はSI4からやや西に位置を変えて建て替えを行ったもので、SI4の床面をさらに掘り込んでいる。この住居の埋土（1～45層）からは炭化物や焼土が多量に検出されたため、焼失住居と考えられる。（大川）

SI3（第14～20図，巻頭図版3～5，PL. 6～9，26，41～45，表1）

標高約61.3mに位置する。後述するSI4の廃絶後、やや西よりに位置を移して構築されている。住居の西側は現在町道の下となっており、未調査のままである。表土～層を除去した後、遺構検出作業を進め、層上面において住居埋土を検出した。検出時から平面形が明瞭であり、埋土上面の縁辺部には放射状に並ぶ炭化材を部分的に確認することができた。

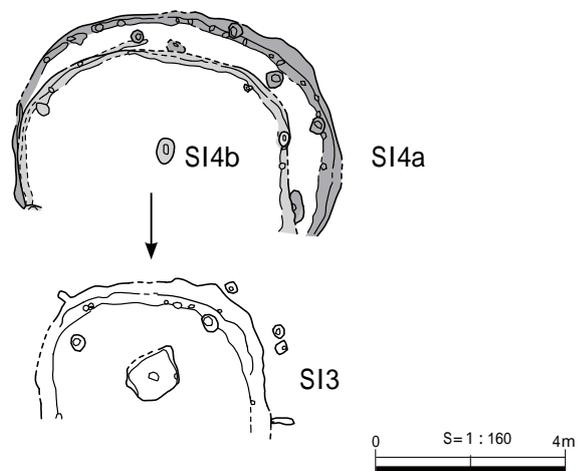
SI3、4を横断してサブトレンチを設け、土層堆積を確認したところ、埋土中には良好に焼土、炭化材が遺存していたため、SI3は焼失住居と考えられる。検出当初から炭化材の遺存状態が良く、住居縁辺のさらに外側にまで炭化材の広がりが認められたため、住居跡の周囲を巡る周堤の痕跡を確認できる可能性があるものと予想し、調査を行ったが、周堤等の痕跡は確認できなかった。

住居の規模は南北4.7m、東西は推定約4m、形態は隅丸方形を呈する。壁高は東側で約0.5m、南北は0.3～0.5mの高さを測る。床面の標高は約61.0mで、床面積は10㎡以上である。支柱穴はP1、P2の2本と推定され、P1（35×30-62）cm、P2（38×30-63）cmを測る。それぞれの柱穴に柱痕跡は認められなかった。P2の埋土中には炭化材が認められ、埋土の上部には焼土（43層）が堆積していた。焼失後に柱を抜き取った可能性も考えられよう。P1とP2の柱間距離は約2.8mである。P3が中央ピットと推定される。規模は（105×90-40）cmを測る。

住居内の土層堆積は、床面直上に堆積した多量の炭化物を含んだ暗褐色土（第34層）および炭化材が床面中央を覆い、焼土（24、26～29層）がその上に堆積する。均一な焼土層が堆積しているのではなく、仔細にみれば赤色が鮮明で、もろい焼土層（24層）や、焼土粒を含んだ暗褐色土（25層等）が堆積している。

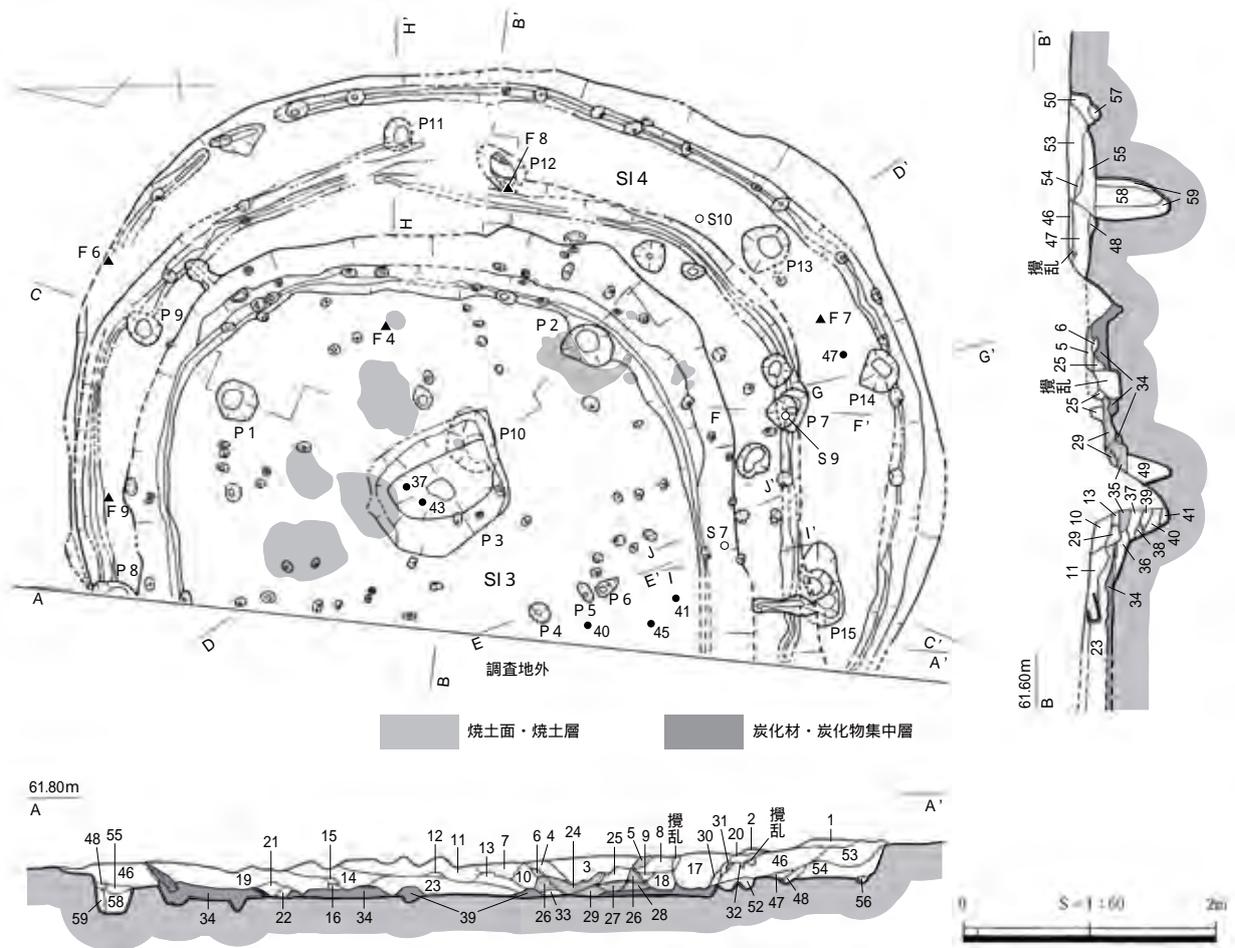
暗褐色土を掘り下げて確認した焼土（第17図）は住居の北西部を除き、東西約2.5m、南北約3.5mの範囲に20cmの厚さで広がる。いわゆるドーナツ状に堆積しており、中央部、縁辺部では焼土の堆積は薄い。図中で明示していないが、中央ピットの埋土中にも焼土層の堆積を確認している。焼土層の状況から土屋根の住居と想定される。

これら焼土を覆う埋土は暗褐色土系の埋土で構成される。住居縁辺部に認められる17層は住居壁面に近い部分で硬くしまるため、他の埋土とはやや性質が異なり、壁際に盛ら



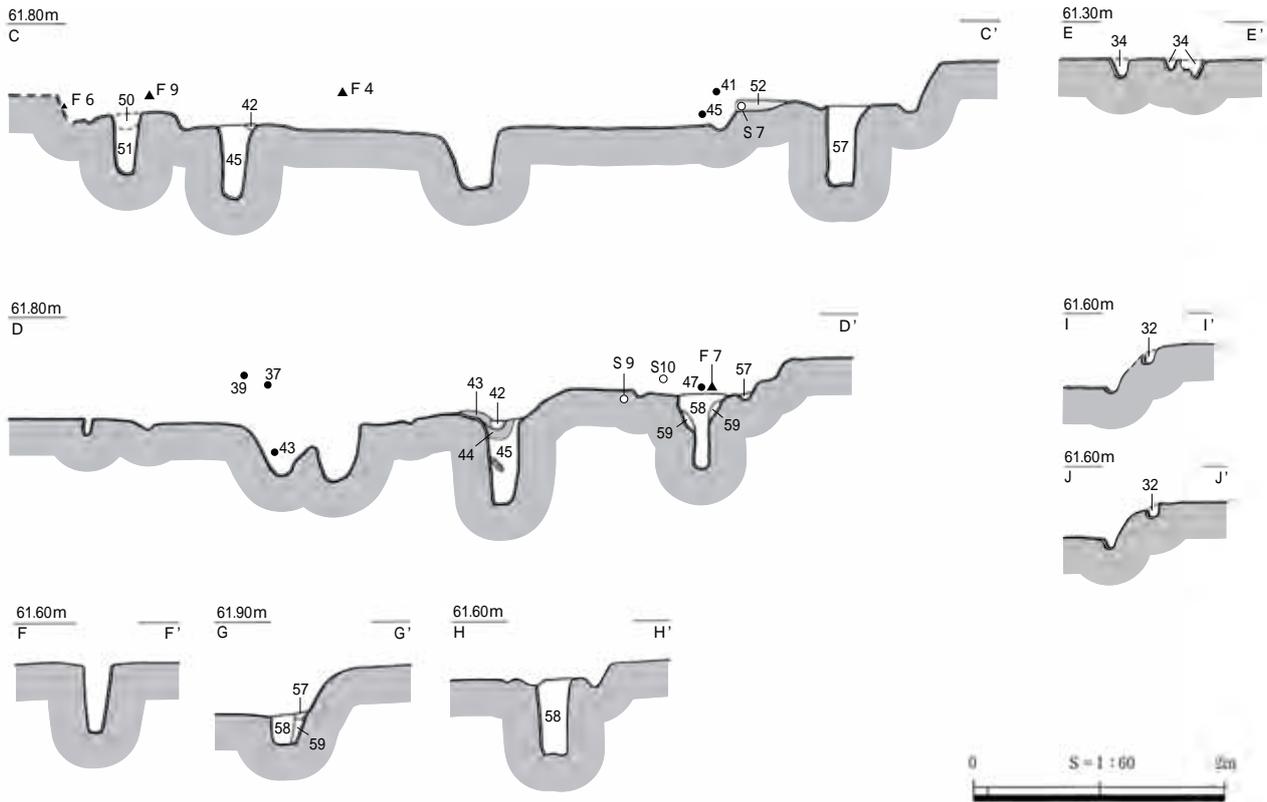
第14図 SI3、4 変遷図

第3章 調査の成果



1. 暗褐色土（粘性なし、しまり悪い、0.5cm以下の焼土ブロック・微細炭化物を含む）
2. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい）
3. 暗褐色土（粘性なし、しまり悪い、3 cm以下の焼土ブロック・微細炭化物を含む）
4. 暗褐色土（焼土をまだらに含み、赤みを帯びる、粘性、しまりなし、1 cm以下の炭化物を含む）
5. 赤褐色土（粘性なし、しまり悪い、焼土層）
6. 赤褐色土（粘性なし、しまり悪い、焼土層）
7. 暗褐色土（0.5cm以下の焼土ブロック、微細炭化物を含む）
8. 暗褐色土（4層よりやや淡い色調、粘性ややあり、しまり悪い、1 cm以下の焼土ブロック・炭化物を含む）
9. 暗褐色土（粘性ややあり、しまり悪い、2 cm以下の炭化物を含む）
10. 暗褐色土（粘性ややあり、しまり悪い）
11. 暗褐色土（粘性あり、0.5cm以下の焼土ブロック・微細炭化物を含む）
12. 暗褐色土（やや赤みを帯びる、粘性あり）
13. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい、0.5cm以下の焼土ブロック・微細炭化物を含む）
14. 暗褐色土（11層よりやや暗い色調、粘性あり）
15. 暗褐色土（粘性あり、しまりややあり、3 cm以下の炭化物を多含）
16. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい、微細炭化物を多含）
17. 暗褐色土（粘性あり、しまり強い、微細炭化物を含む）
18. 暗褐色土（粘性ややあり、しまり悪い、微細炭化物を含む）
19. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい）
20. 暗褐色土（粘性あり、しまり悪い）
21. 暗褐色土（粘性あり、しまり悪い、微細炭化物を含む）
22. 暗褐色土（粘性あり）
23. 暗褐色土（粘性あり、しまり悪い、3 cm以下の炭化物を含む）
24. 赤褐色土（粘性なし、しまりよい、下部は黄色を呈する、焼土層）
25. 暗褐色土（やや赤みを帯びる、粘性ややあり、しまり悪い）
26. 暗褐色土（粘性なし、しまり悪い、微細な焼土ブロックを含む）
27. 赤褐色土（粘性なし、しまり悪い、焼土層）
28. 暗赤褐色土（粘性、しまりなし、微細炭化物を含む、焼土層）
29. 赤褐色土（粘性なし、しまりなし、焼土層）
30. 暗褐色土（粘性あり、微細炭化物を多含）
31. 暗赤褐色土（粘性なし、しまり悪い、焼土層）
32. 暗褐色土（粘性ややあり、しまり悪い、3 cm以下の炭化物を含む）
33. 暗褐色土（焼土ブロックをまだらに含む）
34. 暗褐色土（粘性ややあり、しまり悪い、5 cm以下の炭化物を多含）
35. 橙褐色土（粘性ややあり、しまり悪い、焼土層）
36. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい、微細炭化物を含む）
37. 暗褐色土（粘性あり、しまり悪い、2 cm以下の炭化物を多含）
38. 暗褐色土（粘性あり、しまり悪い、3 cm以下の焼土ブロックを含む）
39. 暗褐色土（粘性なし、しまり悪い、焼土をまばらに含む）
40. 暗褐色土（粘性ややあり、しまりややあり、3 cm以下の炭化物を含む）
41. 暗褐色土（粘性あり、しまり悪い）
42. 暗褐色土（粘性ややあり、しまり悪い、0.5cm大の焼土粒を含む）
43. 赤褐色土（粘性なし、しまり悪い、焼土層）
44. 赤褐色土（粘性なし、しまり悪い、微細炭化物を含む、焼土層）
45. 暗褐色土（粘性なし、しまり悪い）
46. 赤褐色土（粘性あり、しまりよい、微細な焼土粒・炭化物を含む）
47. 暗褐色土（粘性あり、しまりあり）
48. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい、1 cm以下の焼土粒・炭化物を含む）
49. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい、微細な焼土粒・炭化物を含む）
50. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい、微細炭化物を含む）
51. 暗黄褐色土（粘性あり、しまり悪い、3 cm以下のホーキブロックを含む）
52. 暗褐色土（粘性ややあり、しまりよい、ロームブロックを含む）
53. 暗褐色土（粘性あり、しまりあり、2 cm以下のホーキブロック・微細炭化物を含む）
54. 暗褐色土（粘性あり、しまりあり、微細炭化物を含む）
55. 暗褐色土（ホーキブロックを多含）
56. 暗褐色土（粘性あり、しまりよい、微細炭化物を含む）
57. 暗褐色土（3 cm以下のホーキブロックを多含）
58. 暗褐色土（粘性あり、しまり悪い、1 cm以下のホーキブロック・微細炭化物を含む）
59. 暗黄褐色土（粘性強い、しまりあり、3 cm以下のホーキブロックを含む）

第15図 SI3, 4



第16図 SI3, 4

れた土が埋土中に混在している可能性も想定される。

焼失時には、まず上屋の部材やカヤ等が崩落して床面を覆い、その後、住居中央付近に焼土が崩落したと予想される。焼土は一度に崩落したのではなく、被熱していない住居の屋根土の崩落とあわせて段階的に崩れ、堆積したことが予想される。

住居南縁辺を中心に壁面付近で直径10cm以下、深さ10cm程度の小ピットを約20基検出した(第15図, PL 8, 9)。これらの埋土は炭化物を多量に含んだ暗褐色土(32層)が堆積していた。掘り方はいずれも鉛直方向か、住居内側に向けられている。小ピットはこのほか住居床面においても約40基確認している。前者の小ピットについては鳥取環境大学の浅川滋男教授から住居の壁面に設けられた棚を支える杭の痕跡である可能性があり、後者については規則的な配置であれば、床を構成する構造が想定されるが、当住居跡で検出した小ピットは規則的な配置をなしていないため、性格は不明との指導をいただいた。

また住居南西掘り方の上部に長さ50cm、幅20cm、深さ5cmの浅い溝状の掘り込みが認められた。同様の掘り込みが北東隅にも認められる。浅川教授には、扱首の接地痕の可能性があると指摘をいただいた。

炭化材は住居の床面から縁辺部にかけて分布している(第18図)。焼土の分布と対応しており、焼土の堆積が良好でない住居北西部や縁辺部に良好に炭化材が遺存する状況が認められた。住居中央部から検出した炭化材は焼土より下位の34層中に認められ、住居縁辺部の炭化材は焼土より上位の11層中から検出した。住居縁辺部に遺存した炭化材は板状または丸太状と推定され、住居中央を軸に放射状に展開しており、部材の配置から、垂木材と考えられる。南側縁辺部に分布していたこれらの材

の一部は住居掘り方からさらに外側にのびていた（第15図、PL 9 - 2）。垂木材と推定される材は板状を呈するものが大半であり、幅 20 ~ 30cm、材と材との間隔は概ね 10 ~ 20cmである。南西隅や東側の縁辺部では板状の垂木材の上部にカヤが斜めにかかった状態で検出された（第18図、巻頭図版 4 - 2、PL 7 - 4）。検出状況から焼失以前、カヤは垂木材の上に直交していたものと推測される。南辺部の垂木材の一部は樹種同定分析を行っており、その結果クリとされている（表1 取上 162、166 他）（第4章 第1節）。

床面に分布する炭化材は東西で遺存状況が異なる。東側は炭化材が小片として散在し、西側はある程度形状を保った炭化材の分布が密である。多くの炭化材は床面付近（34層中）から出土しているが、上層にあたる7層中から出土した炭化材の中には南北方向に伸びるカヤのまとまり（長さ 35cm、幅 25cm、171）や厚手の部材（長さ 35cm、幅 20cm、厚さ 10cm、175）が確認された（PL 7 - 6）。これらの部材について樹種同定分析を行った結果、カヤはイネ科、厚手の板材はクスノキ科と同定された。床面直上に位置する炭化材の中には厚手の板状の材、丸太状を呈する材やカヤがあり、崩落時の衝撃のせい、分割した状態で散在していた。床面直上で検出した北東、南西方向に伸びる厚手の板状の材（90）は長さ 23cm、幅 10cm、厚さ 4cmのもので、南西端部が折れていた。この材の周辺には長さは 10cm未満、径 5 ~ 7cmの丸太材が直立もしくは横倒しの状態で数点散乱している。これらの一部（42、60）は樹種同定の結果、ヤマグワとされ、放射性炭素年代測定の結果、1,900 ± 40BP とされる（第4章 第1節）。これらのカヤ、部材は住居の上屋構造の一部と考えられるが、住居の全容が不明であるため、部材の推定は困難である。

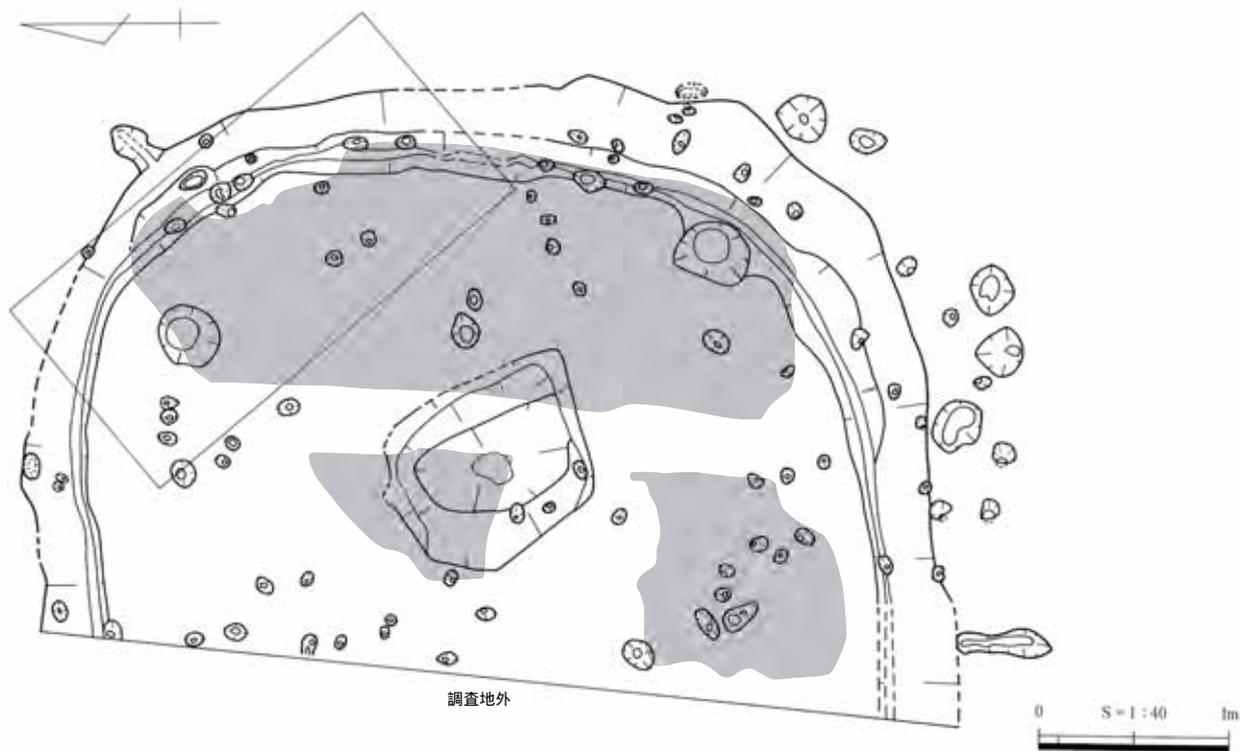
また、加工の痕跡等は明瞭に認められないものの、住居北東部を中心に床面直上にて複数の被熱した礫片が出土した（第19図、巻頭図版 5 - 3）。礫片の大きさは様々であり、床面全域に広く散乱していた。礫片に残る剥離面はいずれも被熱によって剥離したものであり、小破片を除き、いくつかの個体を接合したところ、ほぼ1個体にまとまるため、住居内に据えてあった礫が被熱し、破片が周辺に飛散したものである。礫片の上に炭化材が乗った状況も確認できることから（PL. 7 - 2）被熱による礫片の剥離は炭化材が崩落する直前まで続いていたことが予想される。

出土遺物はいずれも埋土中から出土した。37 ~ 41の甕のほか、ミニチュア土器、土玉、赤彩高坏（42 ~ 44）、サヌカイト製の石鏃（S 4）、砥石（S 5）、磨石（S 6）、袋状鑿（F 4）、不明鉄製品（F 5）が出土している。F 4は形態的な特徴から九州地方からの搬入品と推定される。

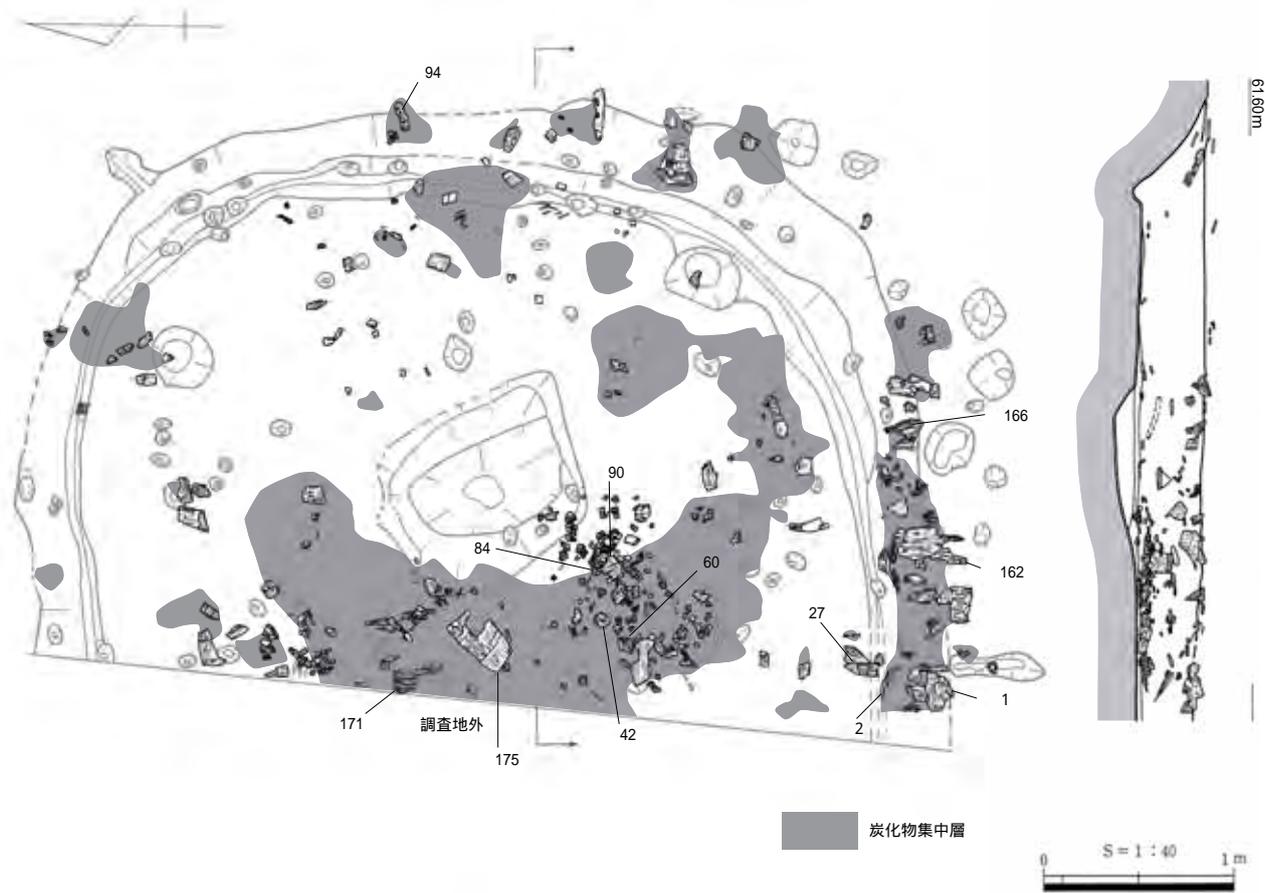
そのほか床面直上や埋土中から粘土塊（45、46）は掲載した2点のほか十数点出土しており、いずれも表面が全体また部分的に黒色または暗褐色に変色している。焼失時に被熱したものと考えられる。この粘土塊のうちの1点と埋土中から出土した土器片3点について胎土分析を実施した。分析した土器片のうちの2点と粘土塊について成分が類似しており、土器の材料となる可能性が指摘された

表1 SI3 出土炭化材樹種同定結果一覧

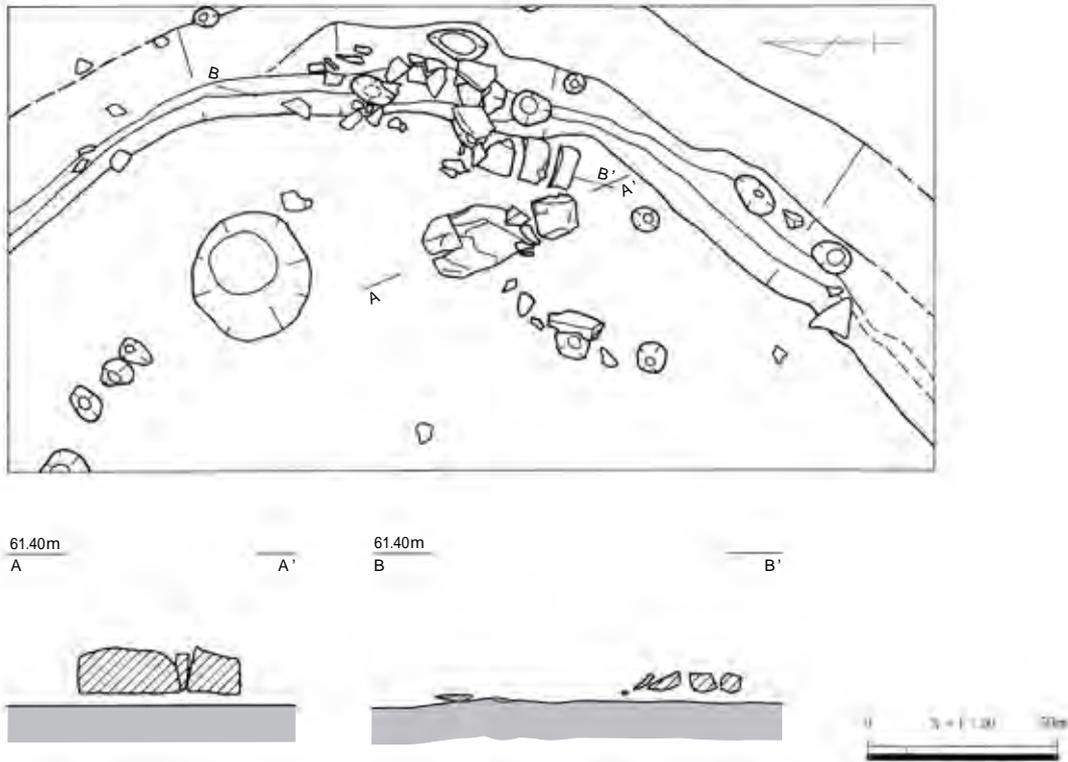
試料番号	取上	樹種	試料番号	取上	樹種
1	42	ヤマグワ	13	90	クリ
2	84	ヤマグワ	14	94	クリ
9	1	クリ	15	162	クリ
10	2	イネ科	16	166	クリ
11	27	クリ	17	171	イネ科
12	60	ヤマグワ	18	175	クスノキ科



第17図 SI3焼土分布



第18図 SI3炭化材検出状況



第19図 SI3出土被熱礫

(第4章 第1節)。また埋土中から出土した炭化種実にはモモと同定されている(第4章 第2節)。住居跡の時期は出土した甕の口縁部の形態的特徴は清水編年の - 3 様式期のものと推定されることから、弥生時代後期後葉と考えられる。(大川)

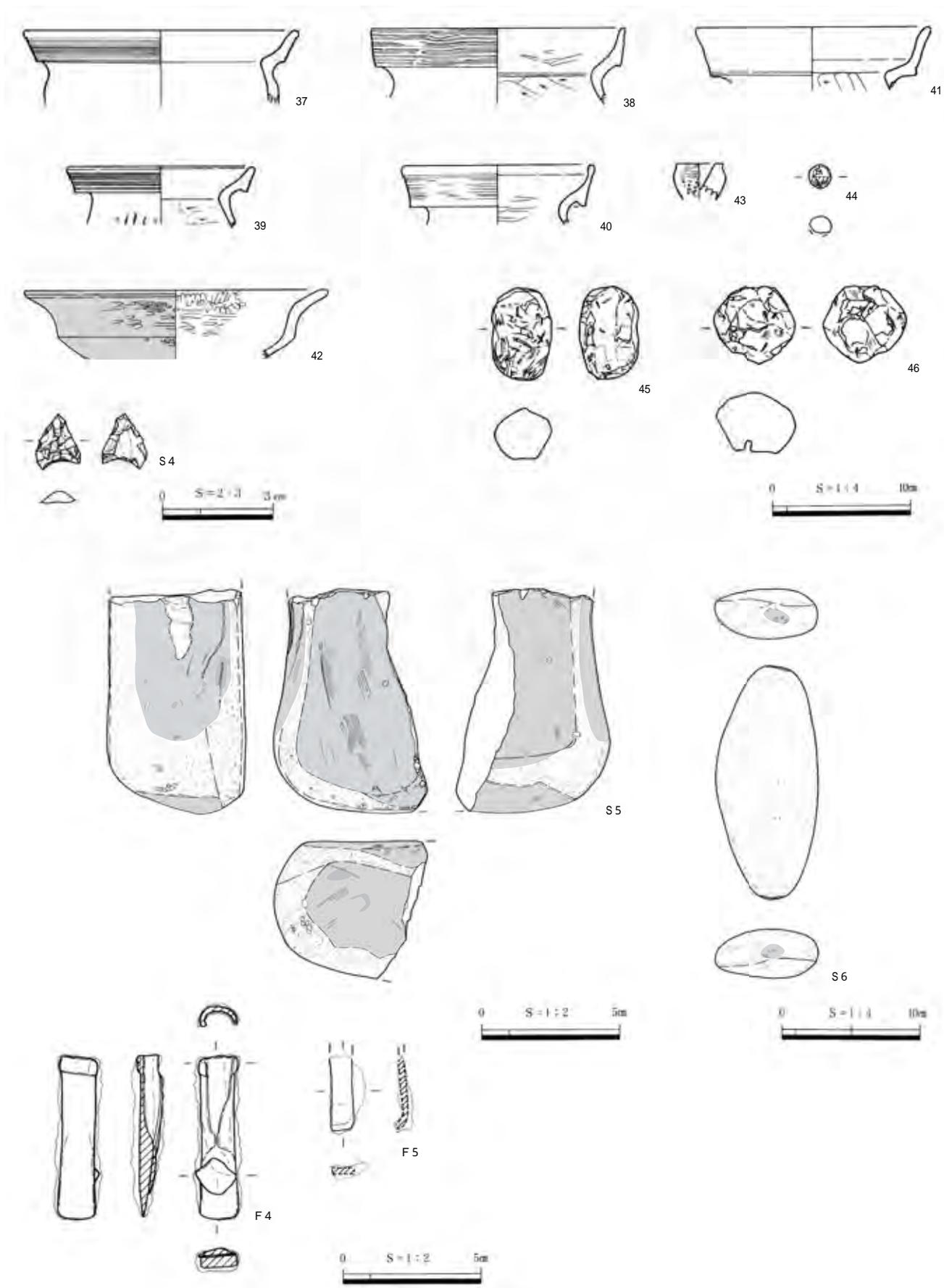
SI4 (第15, 16図, 21図, PL9 - 3, 26, 41, 43 ~ 45)

調査地の南側1区E5グリッド、SI3の東側に位置する。住居床面の大半がSI3によって削平され、さらに西側には未調査地が残っており、住居の全体像については不明であるが、床面を同じくして少なくとも2回の建替えが行われている。埋土の状況から東側が古く、西側が新しい。建替えの順に古いほうをSI4a、新しいほうをSI4bと呼称する(第14図)。

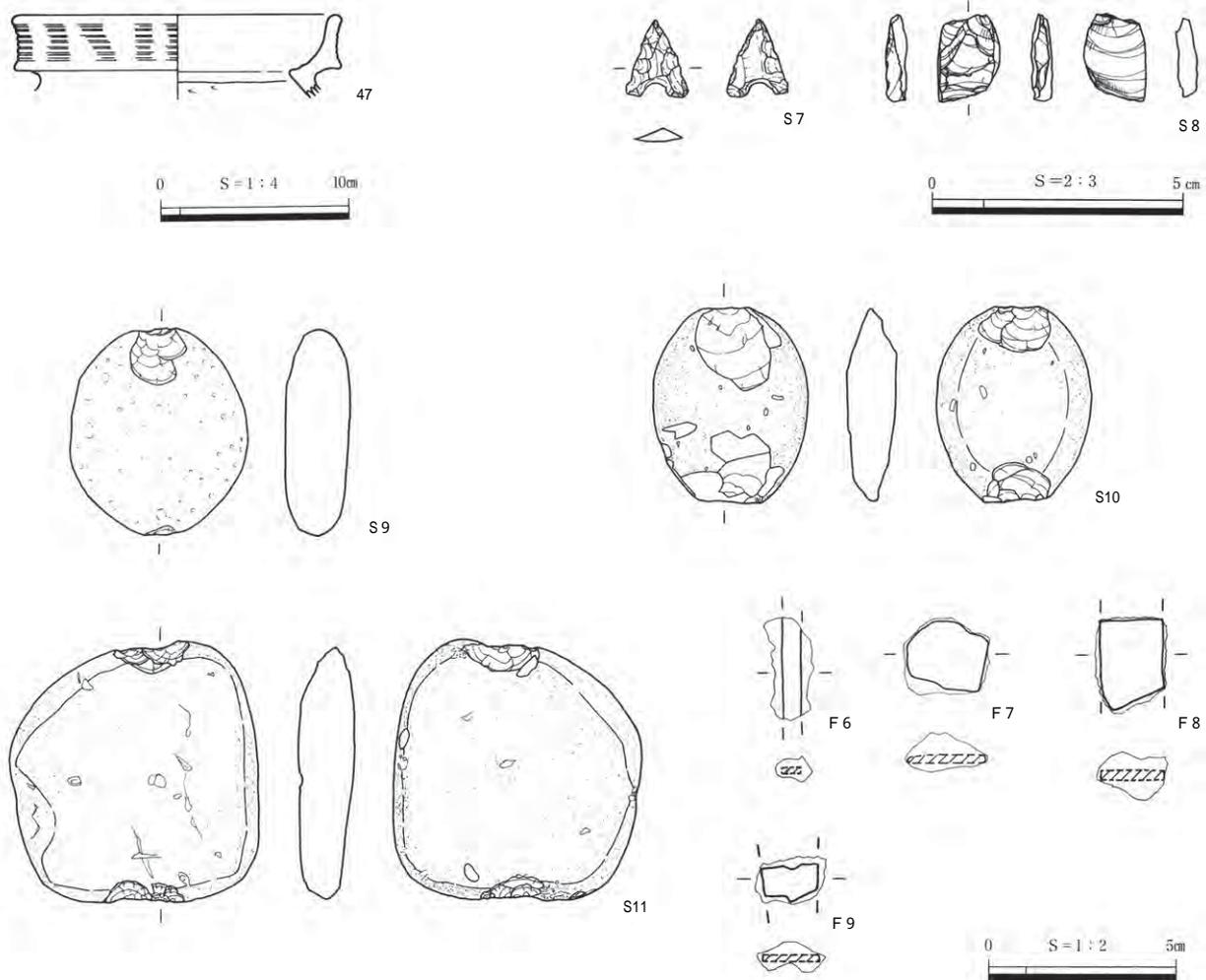
SI4aは残存している部分から推定すると南北を長軸とした楕円形の住居と考えられる。長軸の長さは約7mと推定される。壁高は南側で約30cm、北側で約20cmの高さを測る。床面縁には周溝が巡るが、周溝の一部は建替え後のSI4bと重複している。支柱穴(P8、9)は地山から掘り込まれており、それぞれの深さは20~60cmである。中央ピットはP10と推定される。P8、10はSI4bと共有している可能性がある。

SI4bはSI4aより約1m西に建てられている。周溝がほぼ床面の縁に沿って設けられているが、東側では周溝が連続しない。北東部分では2条の周溝が検出されており、周溝の付け替えまたは、さらに住居の建替えが行われた可能性もある。支柱穴はP11~15と考えられる。

出土遺物として甕の口縁部(47)、石鏃(S7)、楔形石器(S8)、石錘(S9~11)、鉄器(F6~9)を掲げた。遺物は小片が多く、出土した甕の口縁部の形状は清水編年の - 3 様式が充てられることから、当住居跡は弥生時代後期後葉のものと推定される。(大川)



第20図 SI3出土遺物



第21図 SI4出土遺物

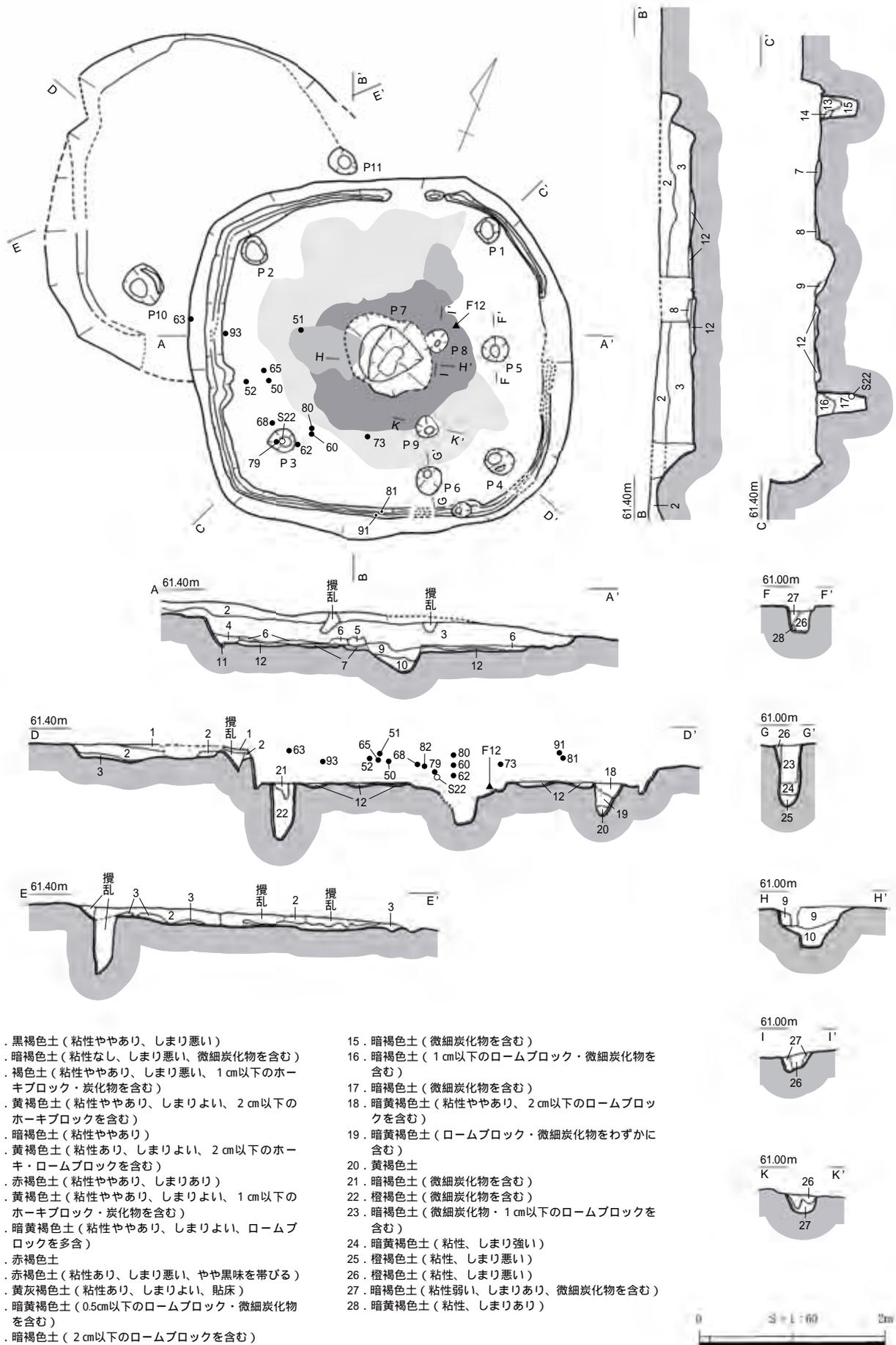
SI5 (第22 ~ 26図, PL.10, 27 ~ 30, 41 ~ 45)

1区E 4 ~ F 4グリッド、標高約61mの緩斜面で検出した。平面形は3.7m × 3.6mの隅丸方形を呈し、壁高は残りのよい西壁で約50cm、東壁で約20cmを測る。床面積は約9.6m<sup>2</sup>である。周溝は幅10cm ~ 20cm、深さ5cmで全周する。本住居は、層を床面とし、床面のほぼ全面に貼床を施している。住居中央部には炭化物を多く含む層が1.7m × 1.4mの範囲に認められた。焼土面は住居北東隅と中央ピット西側の2カ所に認められた。また、西側には黒褐色埋土を主体とするテラス部分を確認した。このテラス部分と住居の床面の比高差は約30cmである。

埋土は暗褐色土、暗黄褐色土を主体とし、28層に分層できた。ほとんどの層で黄褐色土(層)や赤褐色土(層)の粒やブロックを含み、炭化物も埋土全般にわたって含まれている。ピットは9基確認した。そのうち位置や深さから支柱穴と考えられるのはP 1 ~ 4である。それぞれのピットの規模はP 1 (30 × 25 - 39) cm、P 2 (30 × 25 - 60) cm、P 3 (30 × 25 - 53) cm、P 4 (32 × 26 - 35) cmである。

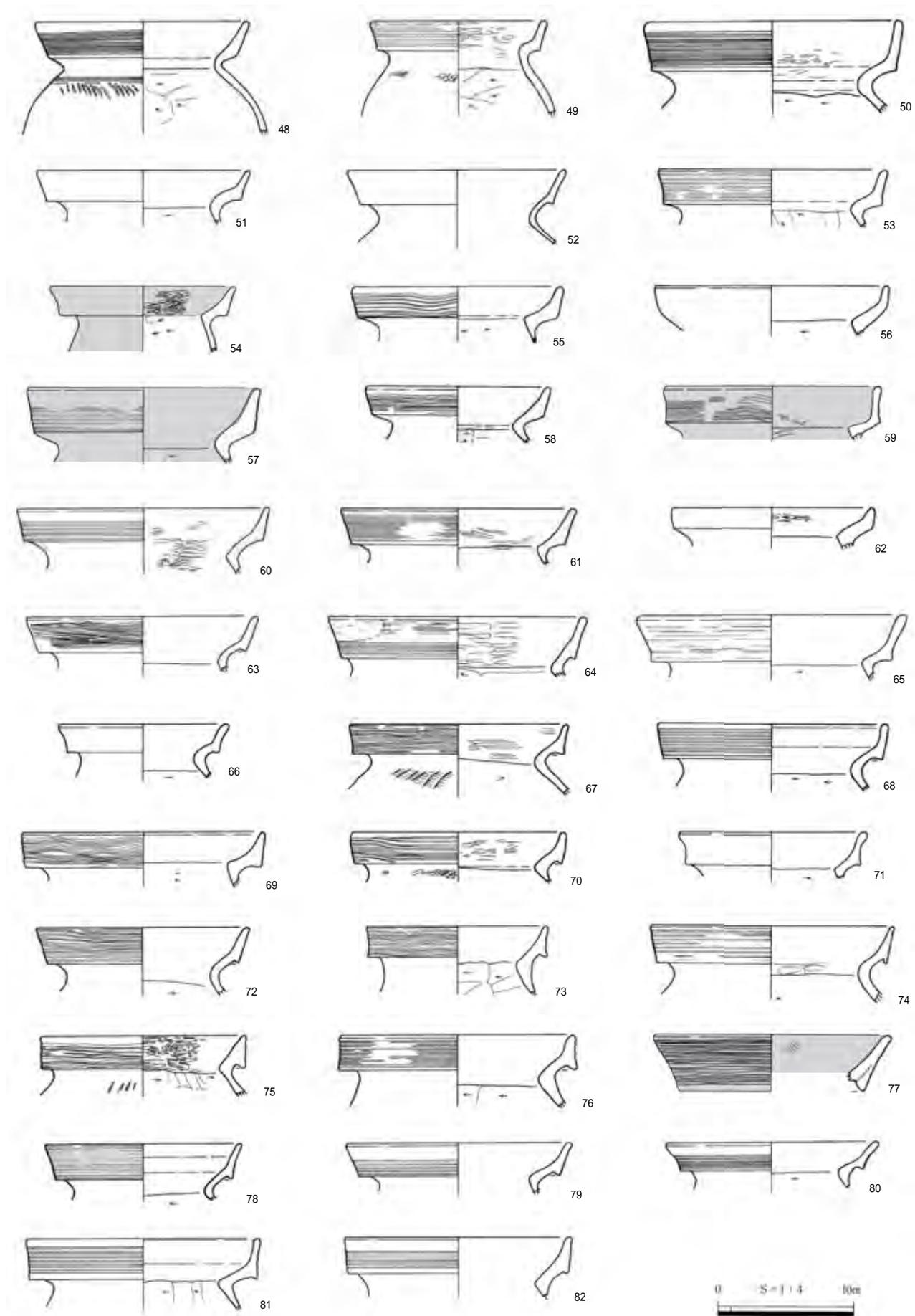
遺物は東半部にはほとんど認められず、西半部の埋土中および床面直上でまとまって出土した。土器は甕、器台、高坏、手づくね土器等が出土している。甕は口縁部に多条沈線を施した複合口縁を持つものが多い。70、73、75、76など口縁部が直立するものもあるが、大半は外反する。92、93は器台、94は高坏の脚部、95は手づくね土器である。

石器は剥片石器、礫石器ともに認められた。S12 ~ S14は石鏃、S15は二次加工痕のある剥片である。

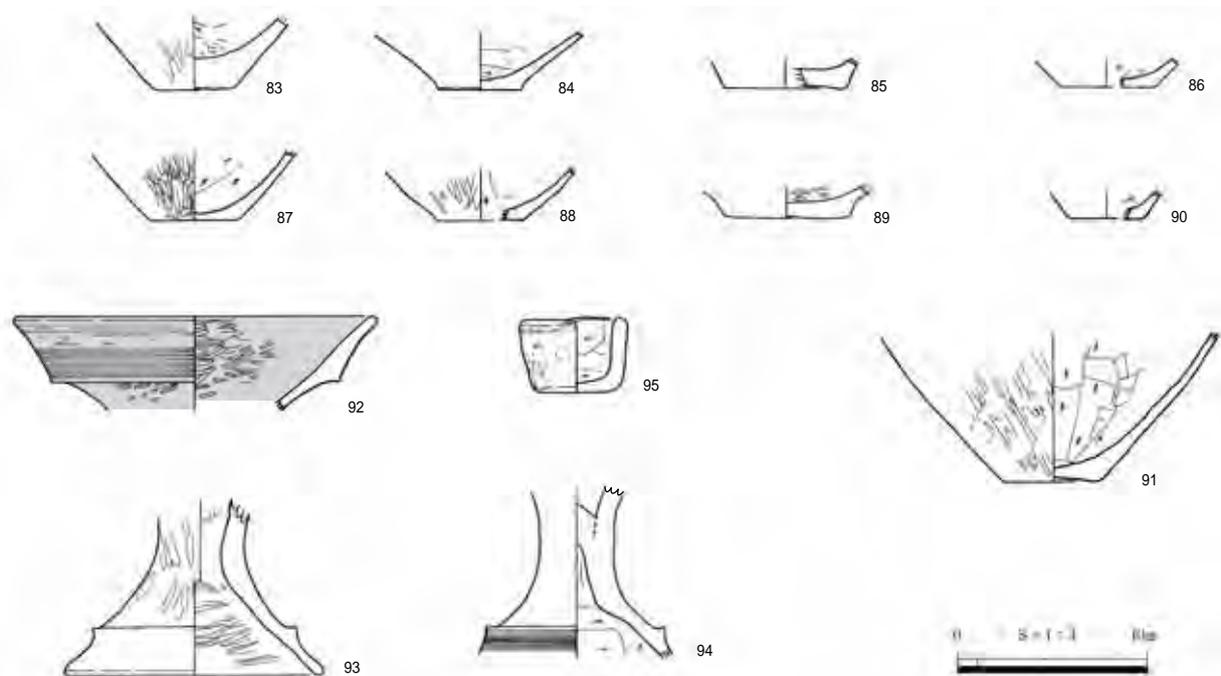


1. 黒褐色土 (粘性ややあり、しまり悪い)
2. 暗褐色土 (粘性なし、しまり悪い、微細炭化物を含む)
3. 褐色土 (粘性ややあり、しまり悪い、1cm以下のホーキブロック・炭化物を含む)
4. 黄褐色土 (粘性ややあり、しまりよい、2cm以下のホーキブロックを含む)
5. 暗褐色土 (粘性ややあり)
6. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、2cm以下のホーキ・ロームブロックを含む)
7. 赤褐色土 (粘性ややあり、しまりあり)
8. 黄褐色土 (粘性ややあり、しまりよい、1cm以下のホーキブロック・炭化物を含む)
9. 暗黄褐色土 (粘性ややあり、しまりよい、ロームブロックを多含)
10. 赤褐色土
11. 赤褐色土 (粘性あり、しまり悪い、やや黒味を帯びる)
12. 黄灰褐色土 (粘性あり、しまりよい、貼床)
13. 暗黄褐色土 (0.5cm以下のロームブロック・微細炭化物を含む)
14. 暗褐色土 (2cm以下のロームブロックを含む)
15. 暗褐色土 (微細炭化物を含む)
16. 暗褐色土 (1cm以下のロームブロック・微細炭化物を含む)
17. 暗褐色土 (微細炭化物を含む)
18. 暗黄褐色土 (粘性ややあり、2cm以下のロームブロックを含む)
19. 暗黄褐色土 (ロームブロック・微細炭化物をわずかに含む)
20. 黄褐色土
21. 暗褐色土 (微細炭化物を含む)
22. 橙褐色土 (微細炭化物を含む)
23. 暗褐色土 (微細炭化物・1cm以下のロームブロックを含む)
24. 暗黄褐色土 (粘性、しまり強い)
25. 橙褐色土 (粘性、しまり悪い)
26. 橙褐色土 (粘性、しまり悪い)
27. 暗褐色土 (粘性弱い、しまりあり、微細炭化物を含む)
28. 暗黄褐色土 (粘性、しまりあり)

第22図 SI5



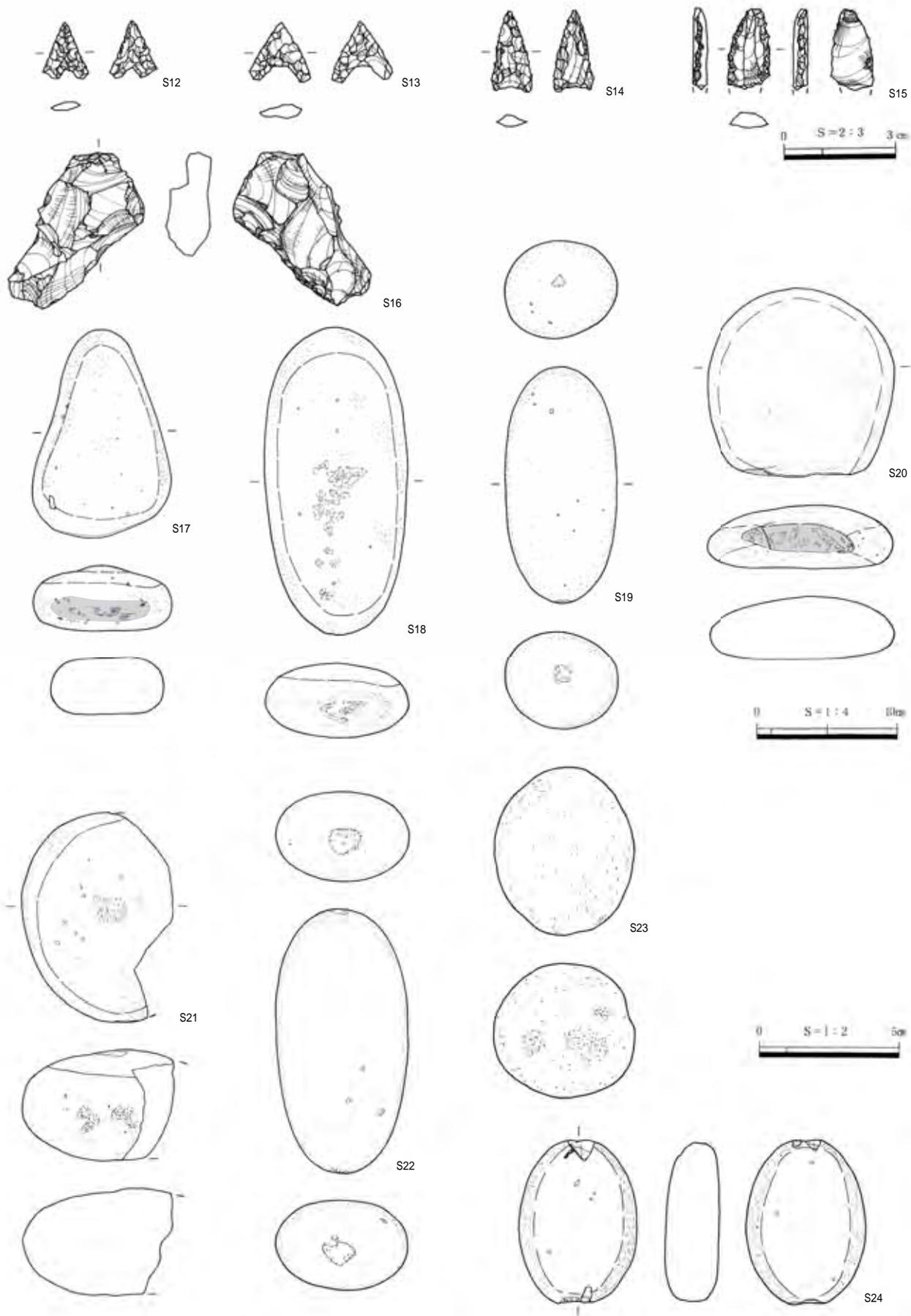
第23図 SI5出土遺物



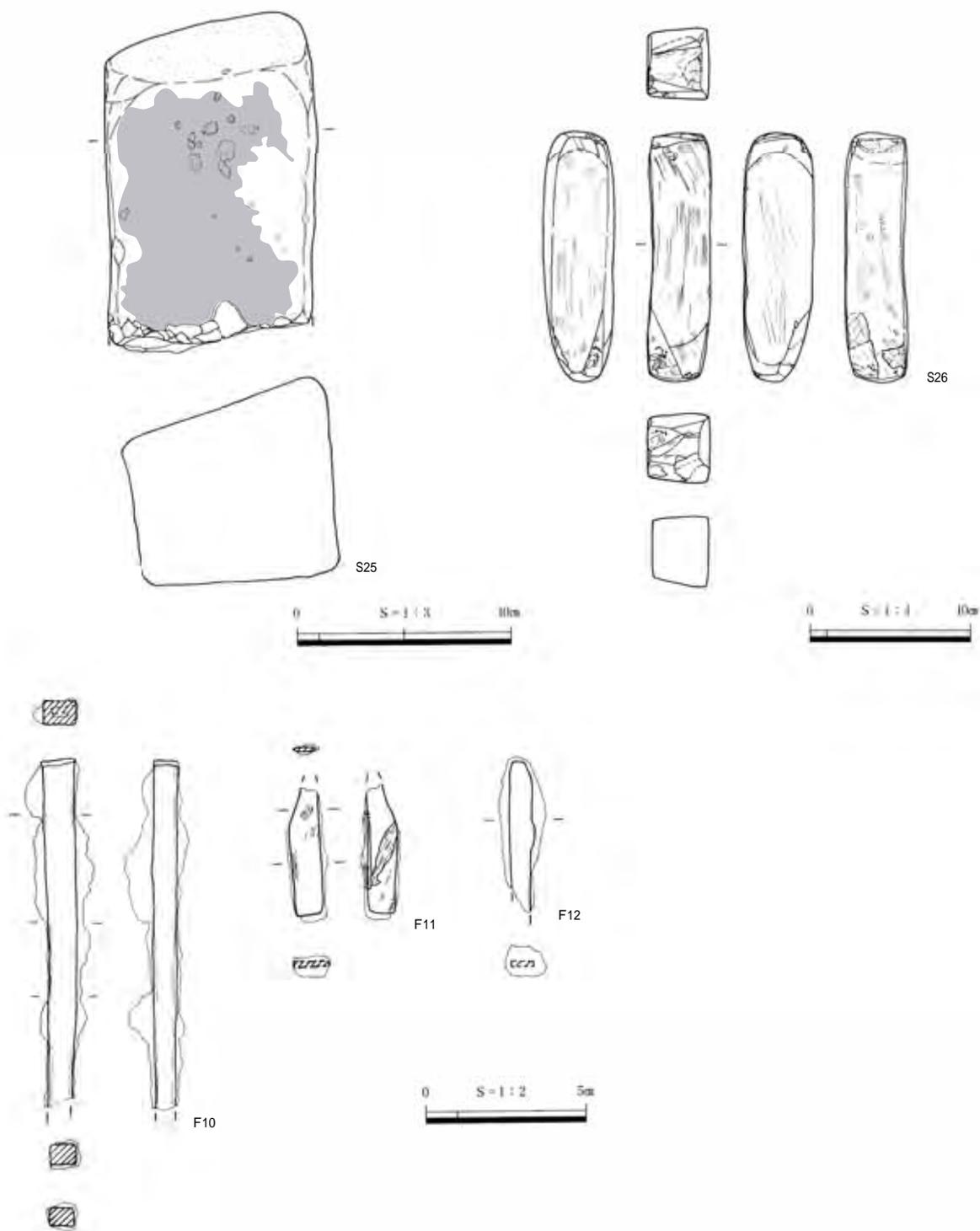
第24図 SI5出土遺物

S17 ~ 23 は磨石・敲石である。S23 はP 3 の埋土中から出土している。S24 は両端部を打ち欠いた石錘である。S25 は台石、S26 は砥石である。鉄器は床面直上から鑿 F10、鉈 F11 が出土したほか、埋土中からは棒状鉄製品 F12 が出土した。テラス部分からも土器を数点検出したが、いずれも細片のため図化していない。

出土した土器の形態的特徴から、清水編年の - 3 様式が充てられ、本遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。(瀨本)



第25図 SI5出土遺物



第26図 SI5出土遺物

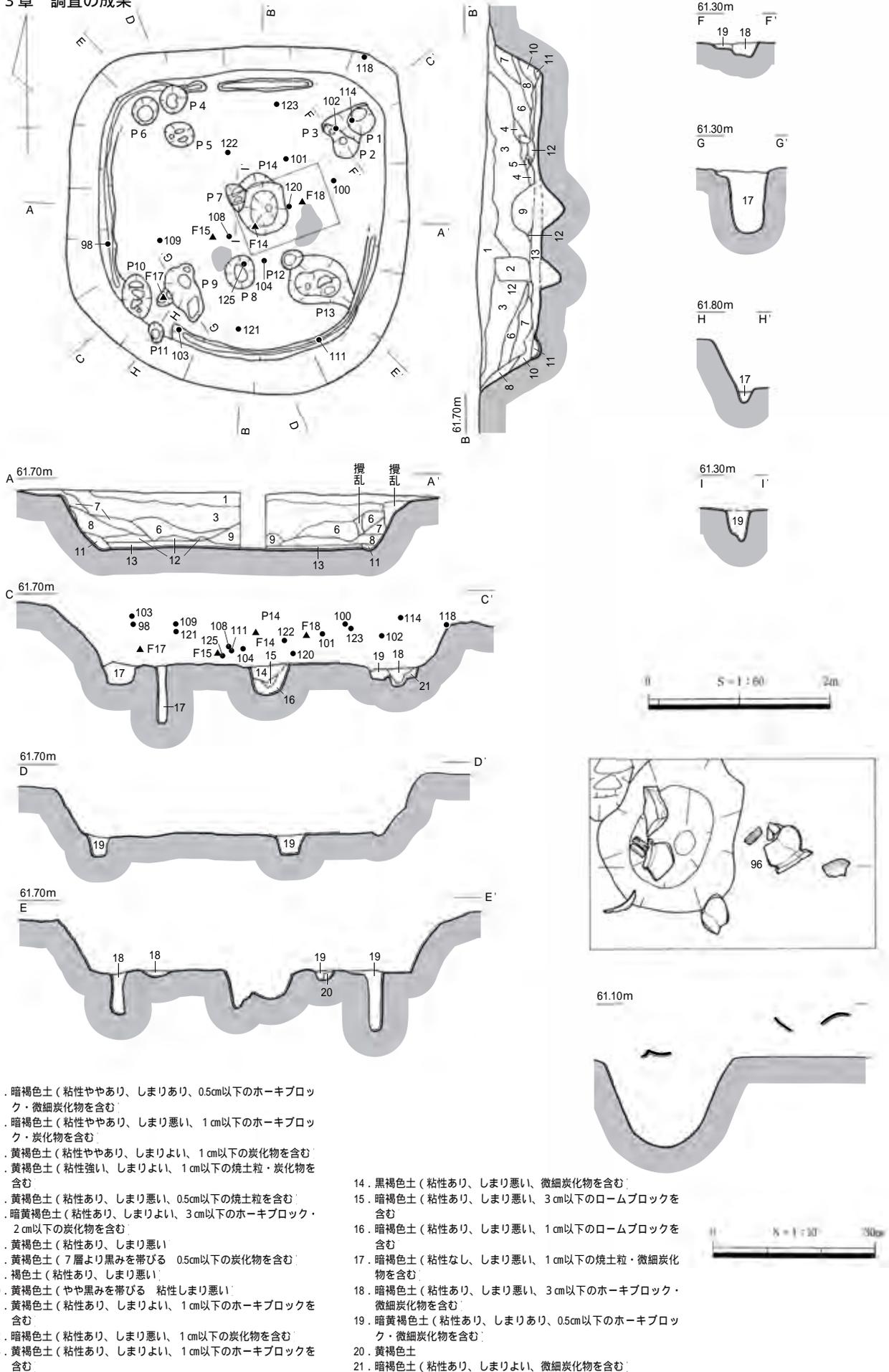
SI6 (第27 ~ 30図, 巻頭図版6 - 1, PL.11, 30 ~ 32, 42, 43, 46, 47)

1区の南側F4グリッド、標高約61.5mの平坦面に位置する。平面形は3.9m x 3.7mの隅丸方形で、南側はやや胴張の形状を呈する。周溝は幅10cm、深さ約5cmで、途中とぎれながら全周する。

埋土は黄褐色土を主体とし、23層に分層できた。焼土面は、中央ピット南東側と南西側の床面にそれぞれ1ヶ所ずつ認められた。厚さは6 ~ 8cmである。また、4層上部には、厚さ5cmほどの焼土が認められた。

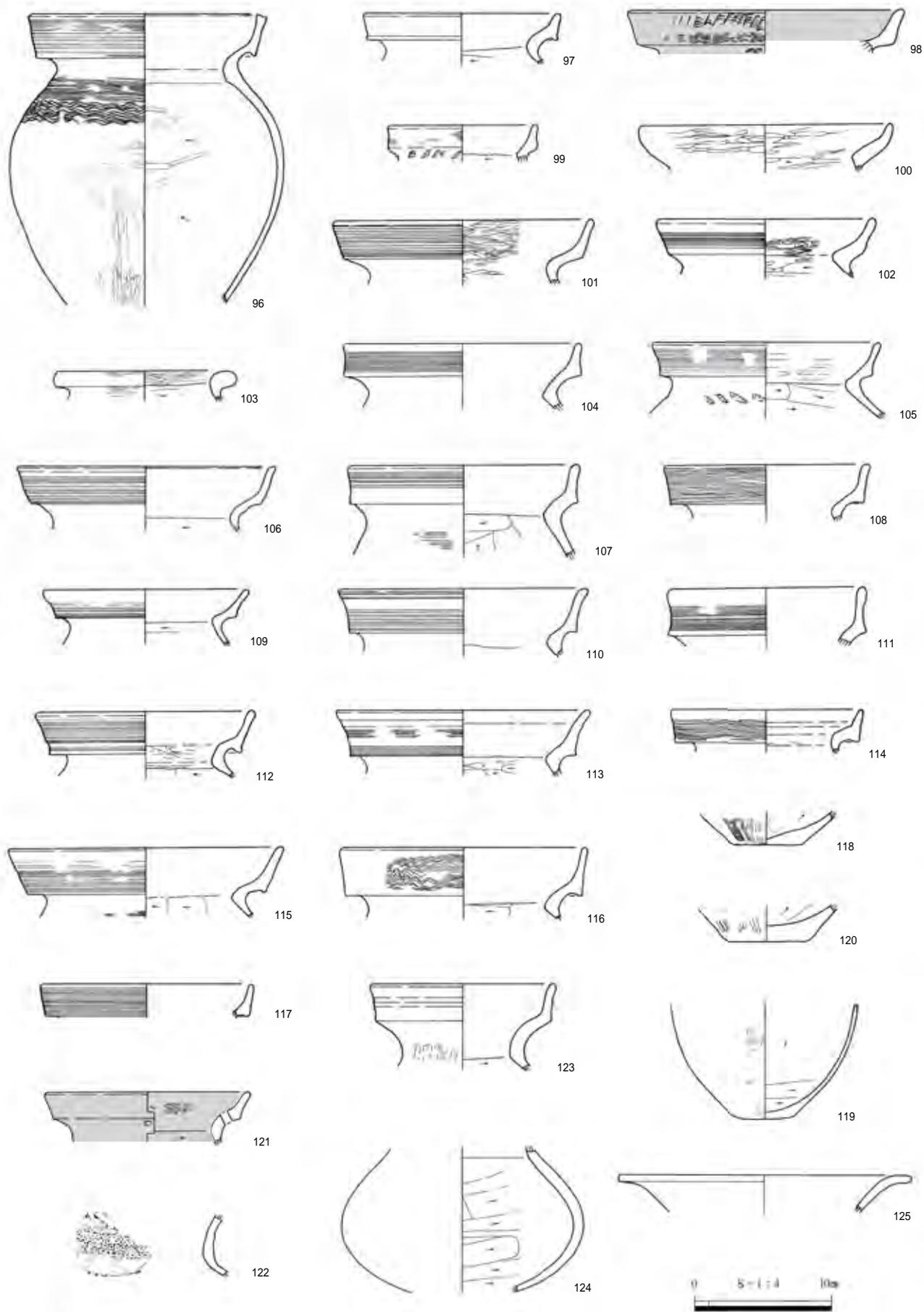
ピットは13基確認した。そのうち、主柱穴と考えられるピットが床面の四隅にそれぞれ2基ない

第3章 調査の成果



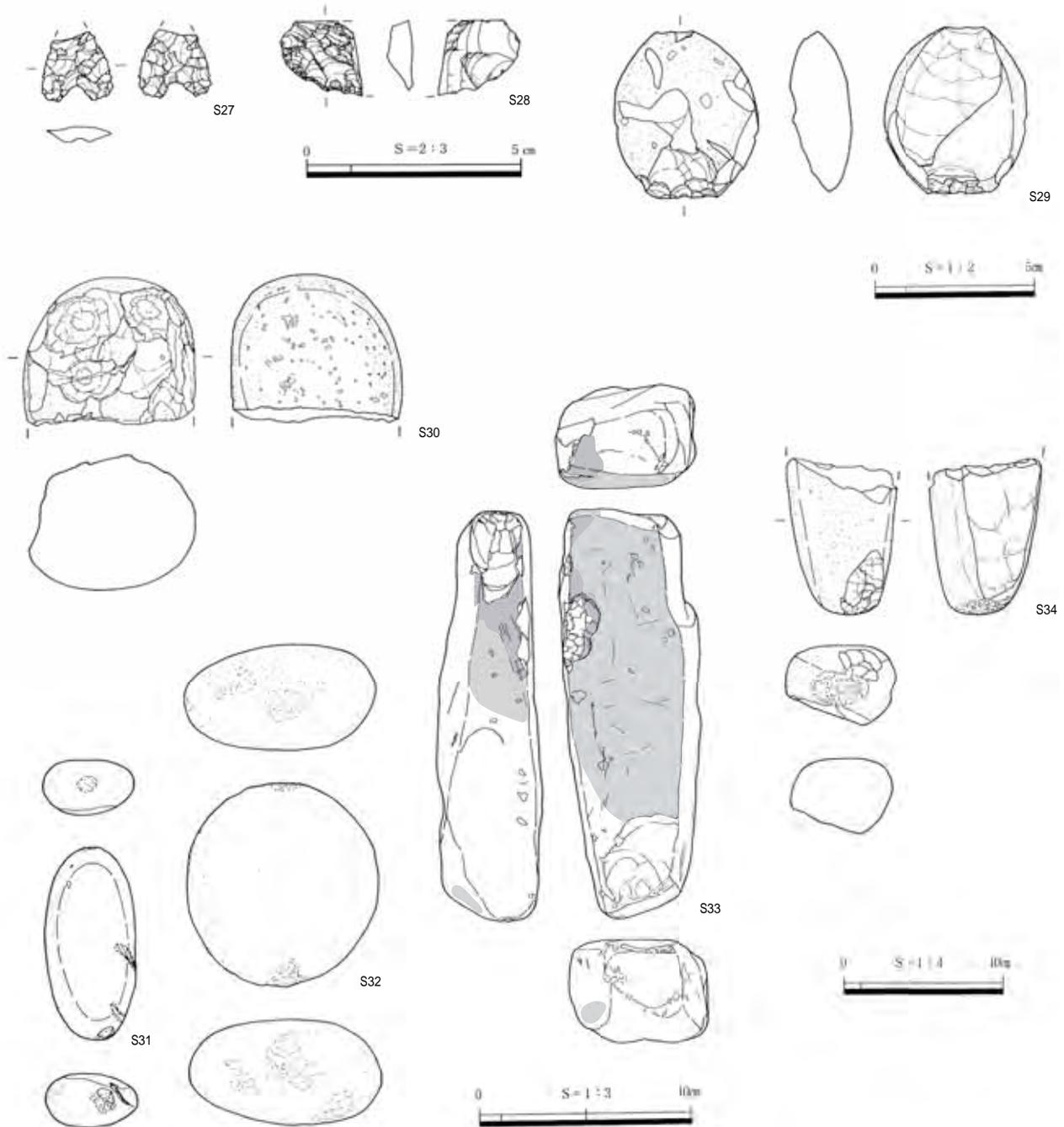
1. 暗褐色土 (粘性ややあり、しまりあり、0.5cm以下のホーキブロック・微細炭化物を含む)
2. 暗褐色土 (粘性ややあり、しまり悪い、1cm以下のホーキブロック・炭化物を含む)
3. 黄褐色土 (粘性ややあり、しまりよい、1cm以下の炭化物を含む)
4. 黄褐色土 (粘性強い、しまりよい、1cm以下の焼土粒・炭化物を含む)
5. 黄褐色土 (粘性あり、しまり悪い、0.5cm以下の焼土粒を含む)
6. 暗黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、3cm以下のホーキブロック・2cm以下の炭化物を含む)
7. 黄褐色土 (粘性あり、しまり悪い)
8. 黄褐色土 (7層より黒みを帯びる 0.5cm以下の炭化物を含む)
9. 褐色土 (粘性あり、しまり悪い)
10. 黄褐色土 (やや黒みを帯びる 粘性しまり悪い)
11. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、1cm以下のホーキブロックを含む)
12. 暗褐色土 (粘性あり、しまり悪い、1cm以下の炭化物を含む)
13. 黄褐色土 (粘性あり、しまりよい、1cm以下のホーキブロックを含む)
14. 黒褐色土 (粘性あり、しまり悪い、微細炭化物を含む)
15. 暗褐色土 (粘性あり、しまり悪い、3cm以下のロームブロックを含む)
16. 暗褐色土 (粘性あり、しまり悪い、1cm以下のロームブロックを含む)
17. 暗褐色土 (粘性なし、しまり悪い、1cm以下の焼土粒・微細炭化物を含む)
18. 暗褐色土 (粘性あり、しまり悪い、3cm以下のホーキブロック・微細炭化物を含む)
19. 暗黄褐色土 (粘性あり、しまりあり、0.5cm以下のホーキブロックを含む)
20. 黄褐色土
21. 暗褐色土 (粘性あり、しまりよい、微細炭化物を含む)

第27図 SI6



第28図 S16出土遺物

第3章 調査の成果



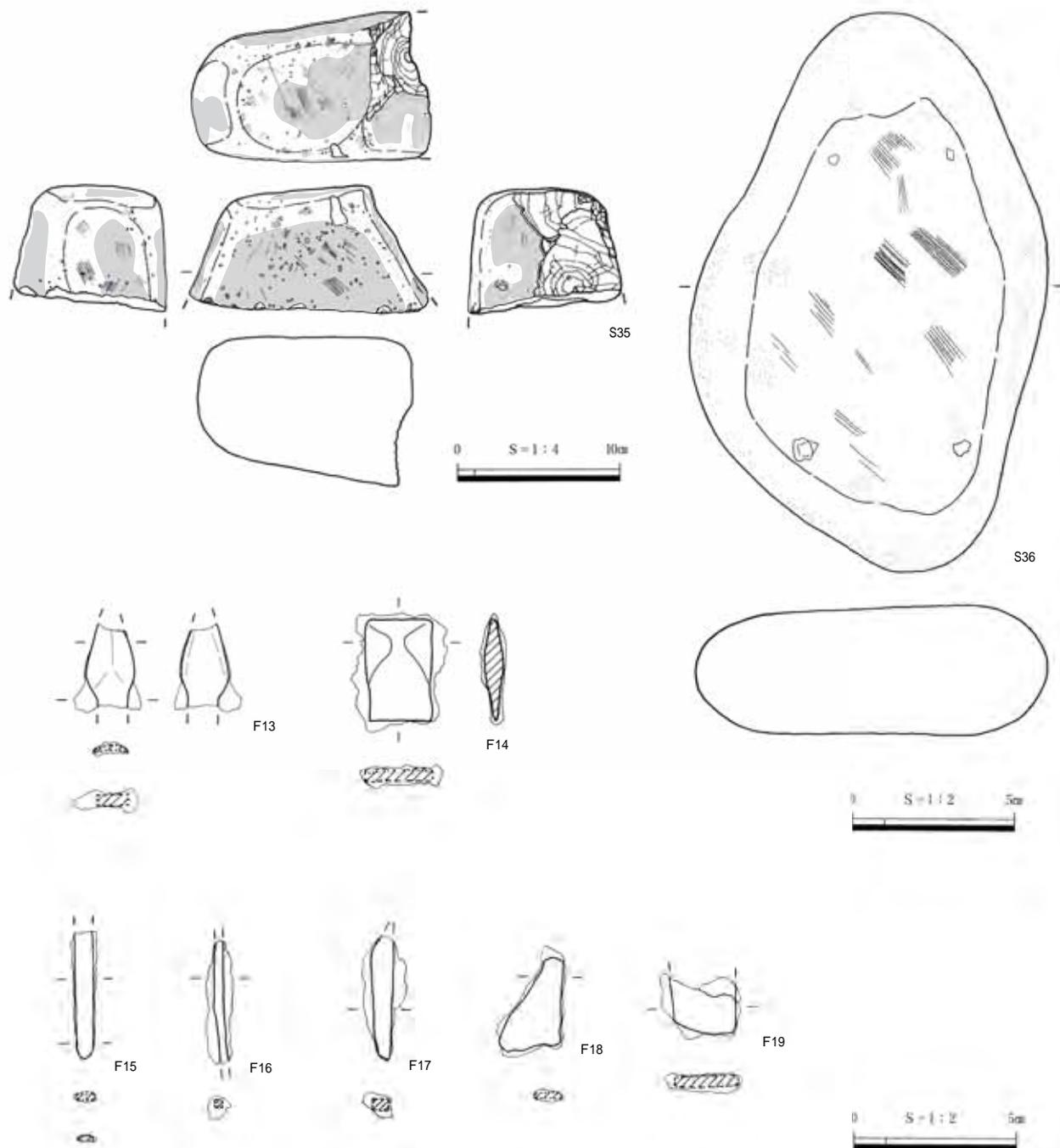
第29図 SI6出土遺物

し3基ずつ隣接しており、4本柱で数回の建て替えがあったと考えられる。

遺物は、土器は甕、壺、器台などが出土した。出土土器片は口縁部片が多く、胴部片や底部片は少なかった。接合を確認できる個体が少なかったが、甕96はほぼ完形に復元できるものである。出土した土器の口縁部は多条平行沈線を施したものが多いが、98の口縁部上半には櫛歯状工具による押引刺突文が見られる。石器はS33の敲石が中央ピット埋土中より出土した。また、2層暗褐色土から凹基無茎鏃S27や磨石S35、S36、敲石S31が出土している。その他、埋土中から二次加工痕のある剥片S28が出土した。鉄器は、中央ピットの周辺の南側から多く出土した。図化したのはF13～F19の7点である。錆化が激しくF13の鉈の他は器種を特定できなかった。

出土した甕の口縁部の形態から清水編年の 3 様式が充てられ、本住居の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

(瀨本)



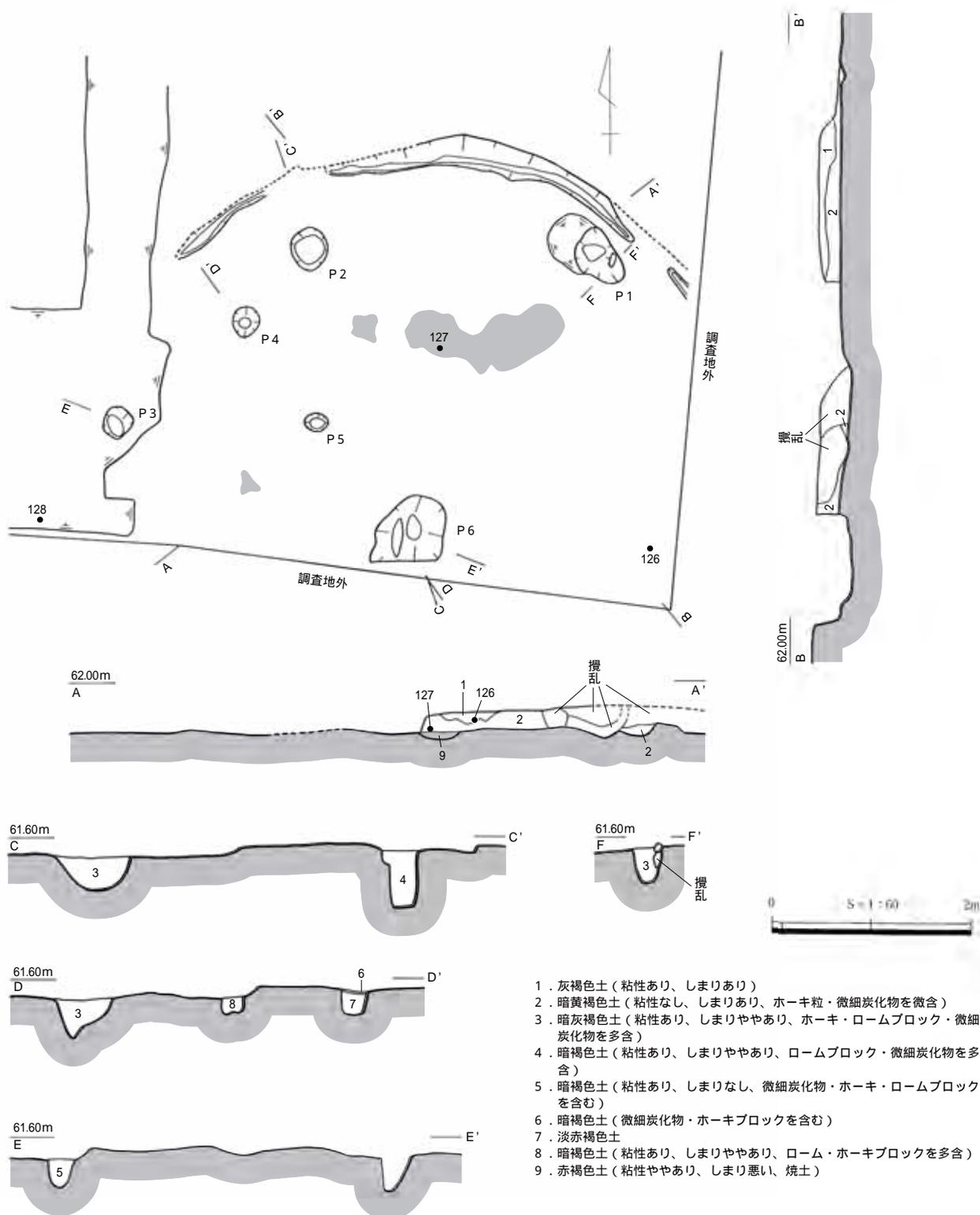
第30図 S16出土遺物

SI7 (第31 ~ 32図, PL.12, 32, 41, 42)

2区南東隅G 6 ~ G 7グリッド、標高約 61.5 mの平坦面に位置する。遺構の東側は一部町道下に及び、南側は調査地外へと広がっているため、遺構全体を検出することはできなかった。

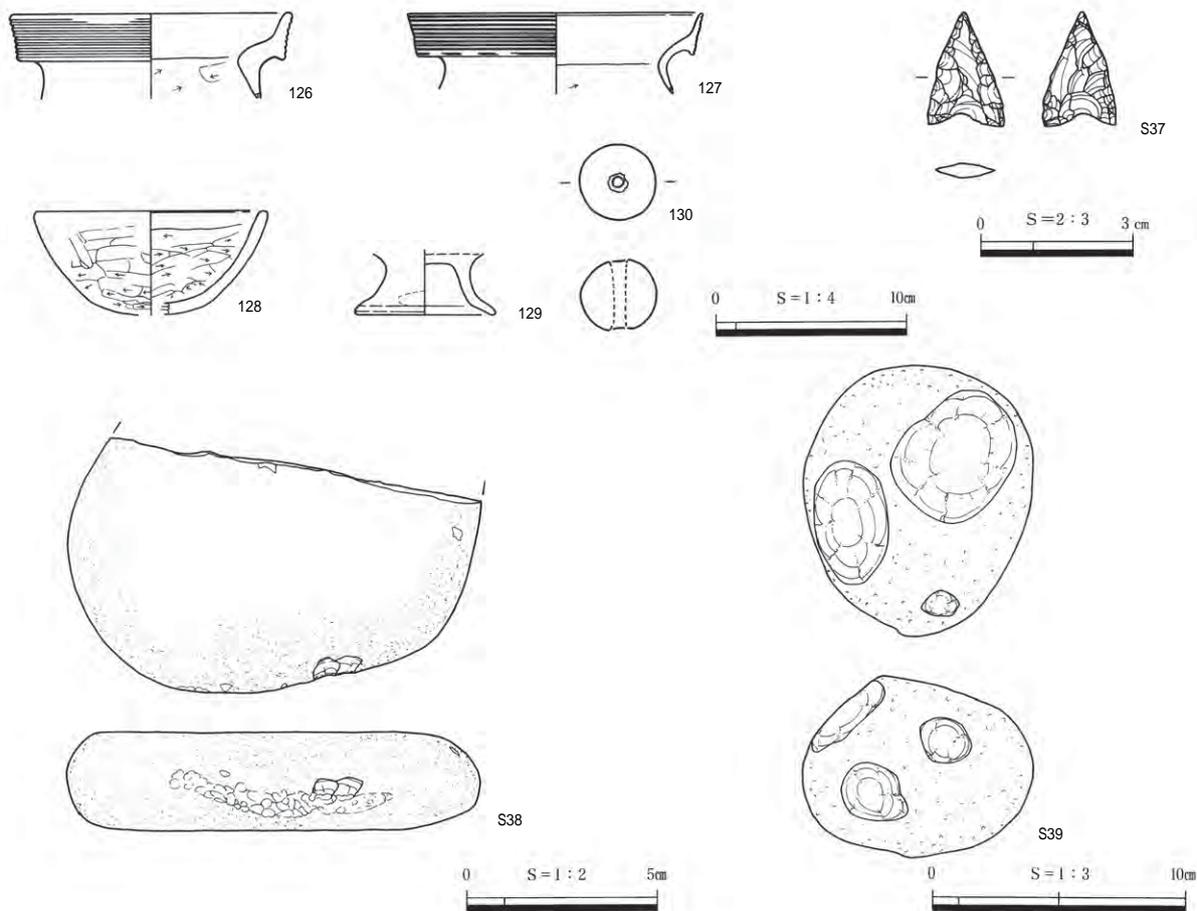
本住居跡は、後世の耕作等による攪乱で壁や埋土、床面が著しく破壊されており、遺存状況はよくない。規模は不明であるが、平面形は、北東部にわずかに残る住居壁と周溝から円形(直径推定 7.2 m)とみられる。周溝は北側に幅 10 ~ 20cm、深さ 2 ~ 3 cm、長さ約 6.9m の範囲で認められた。西側では確認できなかった。

ピットは7基検出した。このうち支柱穴と考えられるのはP 1、2、3である。P 1 2間の角度



1. 灰褐色土（粘性あり、しまりあり）
2. 暗黄褐色土（粘性なし、しまりあり、ホーキ粒・微細炭化物を微含）
3. 暗灰褐色土（粘性あり、しまりややあり、ホーキ・ロームブロック・微細炭化物を多含）
4. 暗褐色土（粘性あり、しまりややあり、ロームブロック・微細炭化物を多含）
5. 暗褐色土（粘性あり、しまりなし、微細炭化物・ホーキ・ロームブロックを含む）
6. 暗褐色土（微細炭化物・ホーキブロックを含む）
7. 淡赤褐色土
8. 暗褐色土（粘性あり、しまりややあり、ローム・ホーキブロックを多含）
9. 赤褐色土（粘性ややあり、しまり悪い、焼土）

第31図 SI7



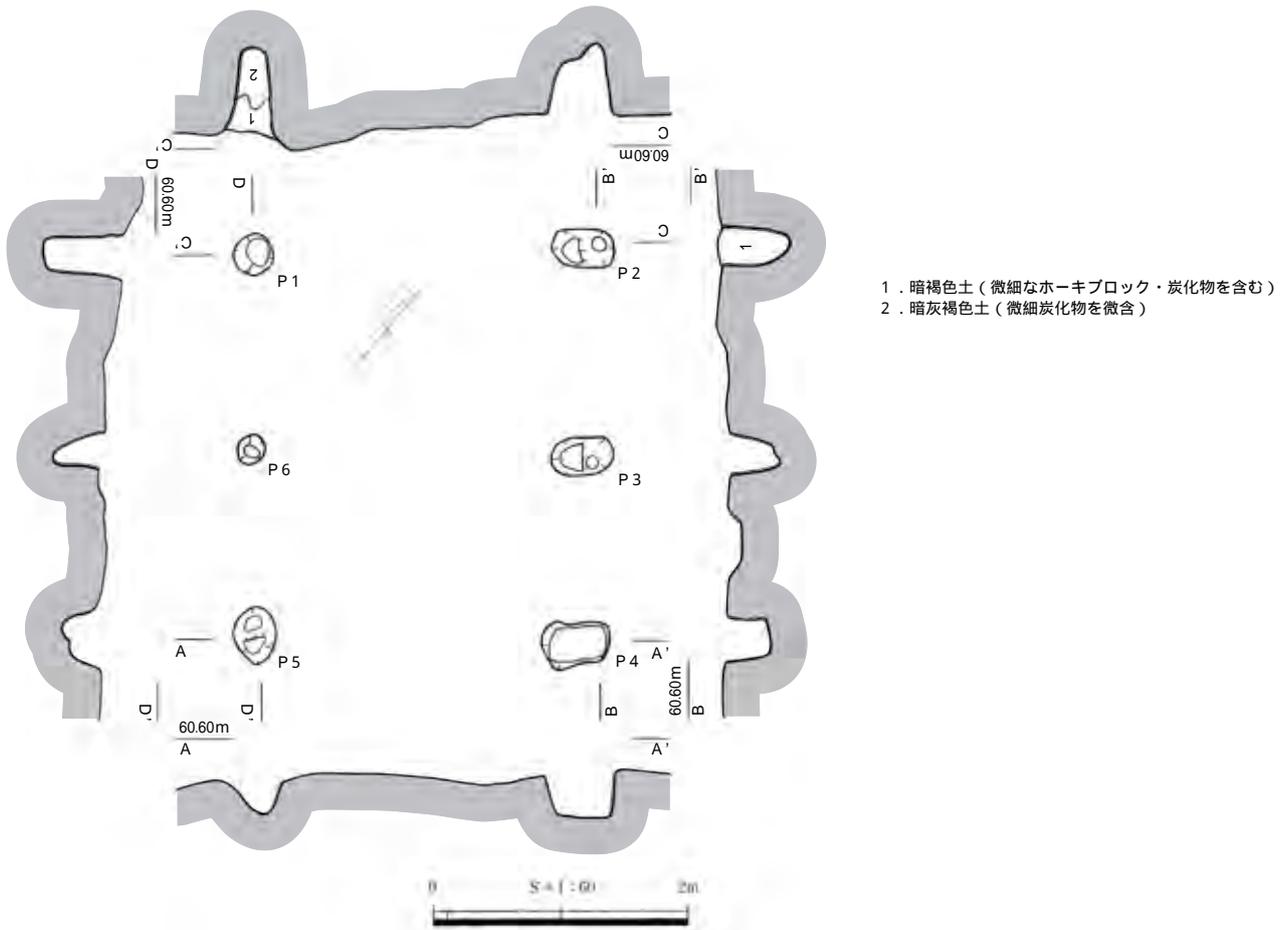
第32図 SI7出土遺物

は60°、同じくP 2 3の角度は55°である。未検出部分においてこれらの角度で柱穴が巡っていたとすると、5本ないし6本柱になる可能性が高い。

先述の通り、埋土は著しく攪乱されており、遺存状況はよくないが、わずかに遺存している埋土は灰褐色土、暗黄褐色土の2層に分層できた。焼土面は、中央ピット(P 6)、P 1、2に囲まれた範囲に2ヶ所、およびP 3 6間に1ヶ所認められた。

出土遺物であるが、土器は埋土中から甕の口縁部(126、127)、低脚坏の脚部(129)、攪乱土中から鉢(128)、土玉(130)などが出土した。石器は2層およびピット1埋土中から敲石(S38)、被熱礫(S39)が、攪乱土中から石鏃(S37)が出土した。また、中央ピット埋土の一部より炭化種子が出土しており、種実同定分析の結果カラスザンショウと同定された(第4章 第2節)。利用状況は不明であるが、周囲に生育していたものが堆積時に取り込まれた可能性も考えられる。

本遺構の時期であるが、出土した甕の口縁部の特徴から清水編年の - 3様式が充てられることから、弥生時代後期後葉と考えられる。(瀨本)



第33図 SB1

掘立柱建物跡

SB1 (第33図, PL.17 - 2, 表2)

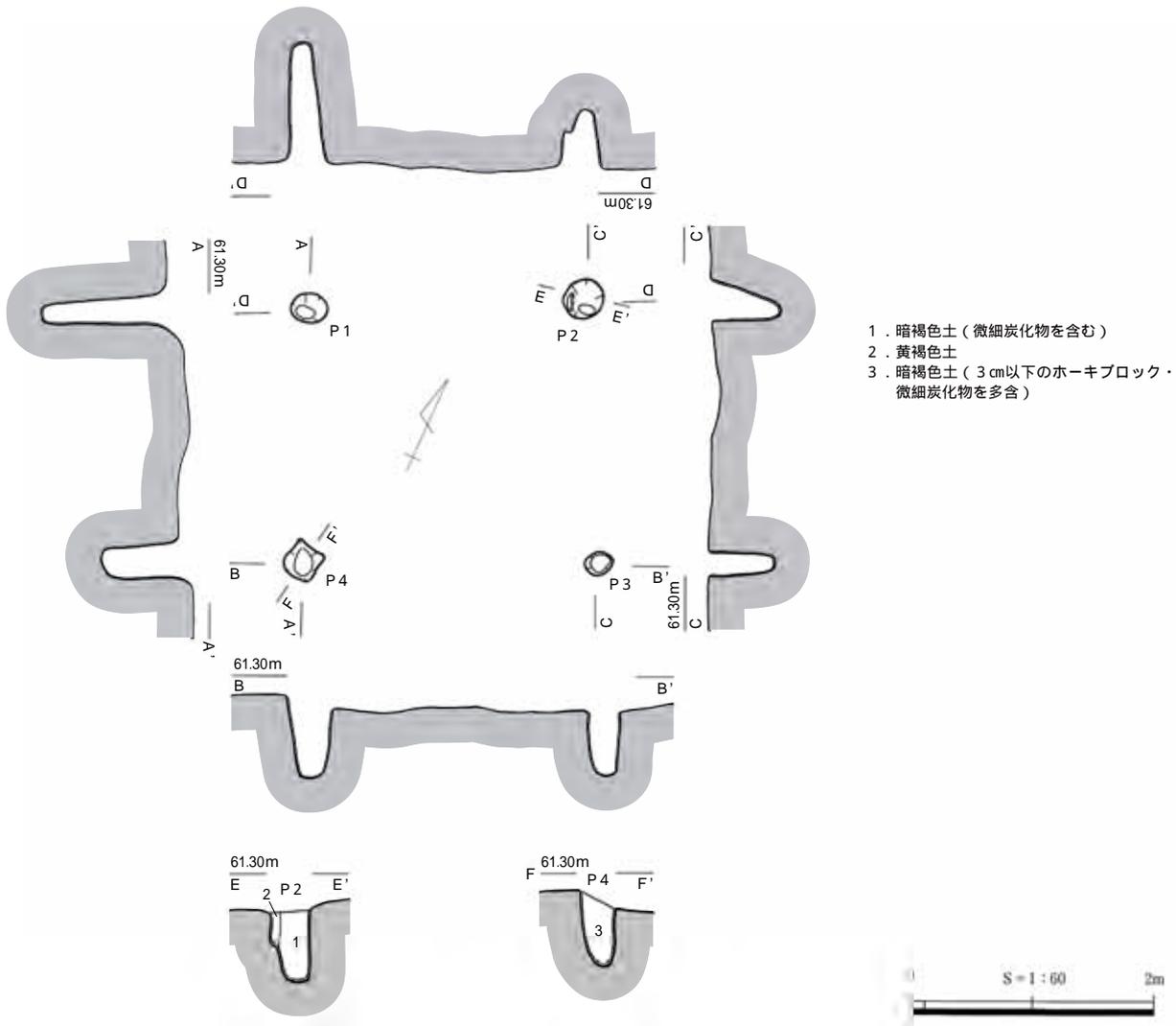
2区北東側 A6 ~ A7 グリッド、標高約 60.4 ~ 60.7 m に位置する梁行 1 間、桁行 2 間の掘立柱建物跡である。耕作に伴う攪乱土を除去した後、層上面で検出した。主軸は N - 36° - W で、各柱穴間距離は、P1 2 の順に 2.7m、1.7m、1.4m、2.6m、1.4m、1.6 m を測る。本建物跡の南東約 1 m には、桁方向をほぼ同じくして SB3 が存する。

ピットの平面形は P2、3、4 はやや隅丸の長方形を呈し、P1、5、6 は円形もしくは楕円形を呈する。ピット底面の標高は 59.9m ~ 60.6 m を測る。P3、4 の埋土中には風化した AT 層やホーキ層と思われるブロックが含まれていた。

表2 SB1ピット計測表

P番号	長軸×短軸 - 深さ(cm)
P 1	34 × 30 - 80
P 2	50 × 30 - 54
P 3	50 × 32 - 40
P 4	64 × 32 - 38
P 5	46 × 32 - 36
P 6	24 × 24 - 42

出土遺物であるが、P2、4 埋土中から甕もしくは壺の口縁部、胴部の破片が、P5 埋土中から同じく底部が、ピット6 埋土中からは黒曜石が出土したが、いずれも細片で図化していない。本建物跡の時期であるが、P4 から出土した口縁部の形態から、清水編年 - 3 様式、弥生時代後期後葉頃であると考えられる。(瀨本)



第34図 SB2

SB2 (第34図, PL.17 - 3, 表3)

2区C7グリッド南東、標高約61mに位置する、梁行1間、桁行1間の掘立柱建物跡である。主軸はN - 23° - Wで、SB1とほぼ方位を揃える。

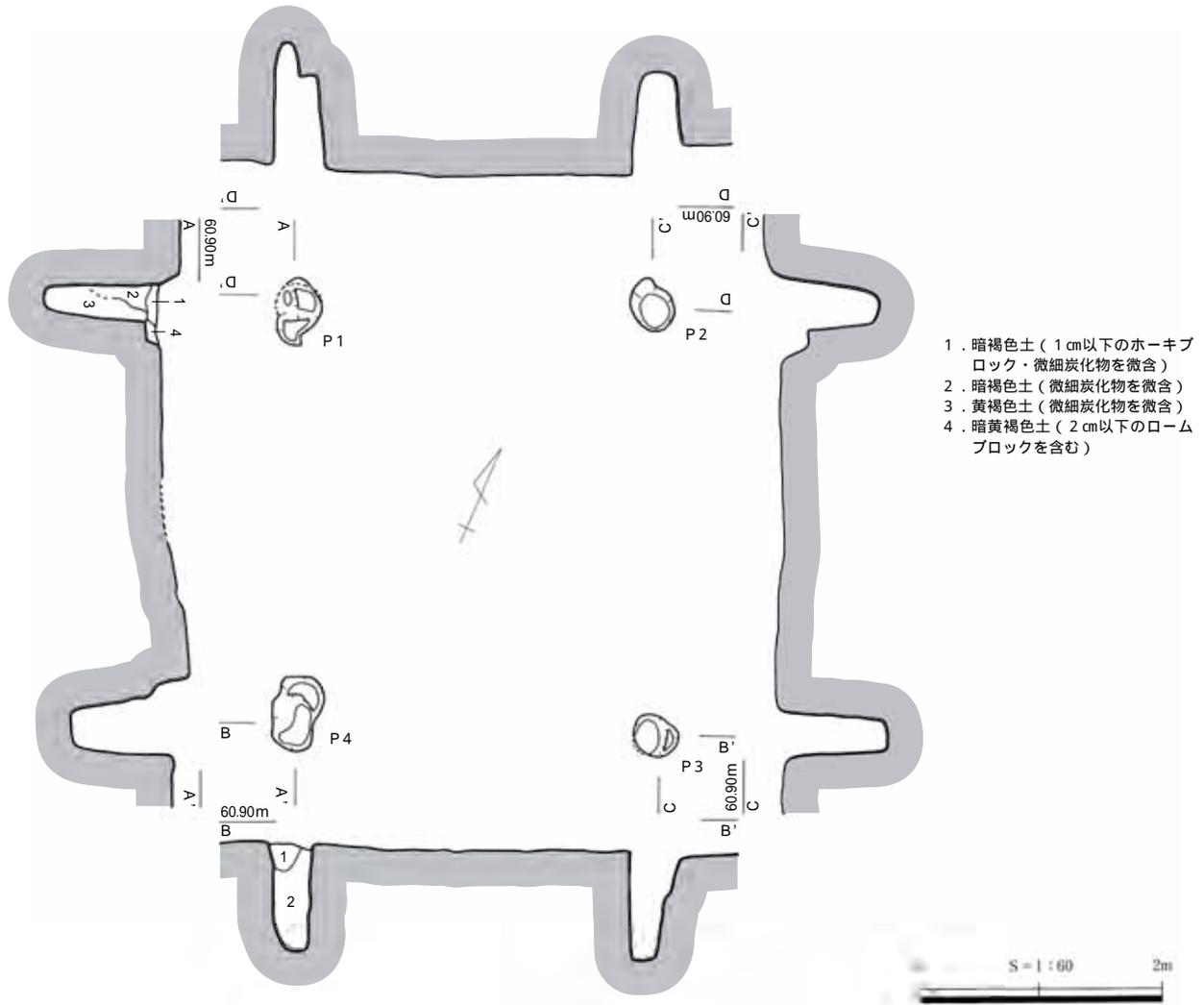
ピットの規模は表3の通りで、ピット底面の標高は59.95m ~ 60.48mを測る。各柱穴間距離は、P1 - 2の順に2.1m、2.4m、2.1mである。

埋土は暗褐色土と黄褐色土で、暗褐色土中には微細炭化物が含まれていた。埋土中からは遺物は認められなかった。そのため、遺物から本遺構の時期を明らかにすることができないが、方位をほぼ同じくするSB1が弥生時代後期後葉頃の遺構と考えられることから、本遺構の時期もこの頃の可能性が高い。

(瀨本)

表3 SB2ピット計測表

P番号	長軸×短軸 - 深さ(cm)
P 1	30×26 - 115
P 2	34×32 - 55
P 3	24×18 - 52
P 4	28×28 - 70



第35図 SB3

SB3 (第35図, PL.18 - 1, 表4)

2区北東側 A 7 ~ B 7 グリッド、標高 60.6 ~ 60.7 m に位置する梁行 1 間、桁行 1 間の掘立柱建物跡である。梨耕作に伴う攪乱土を除去した後、層上面で検出した。主軸は N - 28° - W で、各柱穴間距離は P 1 2 の順に 2.8m、3.5m、2.8m、3.5m を測る。本建物跡の北東約 1 m には、桁方向をほぼ同じくする SB1 が隣接する。柱穴の規模は表 4 の通りである。深さは検出面からの計測値を表している。

埋土は暗褐色土を主体としていた。埋土中には微細炭化物をわずかに含んでおり、一部ホーキブロックも混じっていた。遺物はいずれのピットからも出土しなかった。そのため出土遺物からは本遺構の時期を明らかにできないが、弥生時代後期後葉頃の SB1 と主軸をほぼ等しくすることから、SB1 と同様の時期の弥生時代後期後葉頃の可能性も考えられる。(瀨本)

表 4 SB3ピット計測表

P番号	長軸 × 短軸 - 深さ( cm )
P 1	55 × 35 - 110
P 2	42 × 34 - 94
P 3	40 × 32 - 90
P 4	60 × 40 - 100

表23 石器観察表

	遺構・地区・層位名	挿図・PL	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
S62	SK14 埋土	第69図 PL.41	石錐	黒曜石	4.6	1.7	0.55	9.0	先端部に一部磨耗痕あり
S63	遺構外 暗褐色土	第73図 PL.41	石鏃	黒曜石	3.0	2.5	0.6	3.1	右脚端部欠損
S64	遺構外 暗褐色土	第73図 PL.41	石鏃	黒曜石	1.79	1.6	1.19	0.5	
S65	遺構外 攪乱土	第73図 PL.41	石鏃	黒曜石	1.61	1.31	0.21	0.3	
S66	遺構外 攪乱土	第73図 PL.41	石鏃	黒曜石	2.13	1.64	0.35	0.7	
S67	遺構外 暗褐色土	第73図	石鏃	黒曜石	2.4	1.5	0.39	0.4	
S68	遺構外 攪乱土	第73図 PL.41	スクレイパー	黒曜石	4.35	3.5	1.05	15.7	左右両側面に背面から二次加工を施す
S69	遺構外 攪乱土	第73図 PL.41	楔形石器	黒曜石	2.9	2.4	1.8	8.0	裏面上半部に打撃痕あり
S70	遺構外 攪乱土	第73図 PL.41	楔形石器	黒曜石	2.5	1.85	0.8	3.8	上下両端部に潰れあり
S71	遺構外 攪乱土	第73図 PL.41	楔形石器	黒曜石	5.1	4.1	1.5	27.6	上下両端部に潰れあり、右側面は折断によるもの

表24 鉄器観察表

	遺構・地区・層位名	挿図・PL	遺物名	計測値(cm)			重量 (g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
F1	S11 2層	第12図 PL.44	板状鉄製品	5.5	5.1	1.7	55.0	錆膨れにより一部肥厚
F2	S11 4層	第12図 PL.44	不明	2.5	4.7	1.2	19.6	
F3	S12 床直	第13図 PL.45	棒状鉄製品	4.5	0.7	0.5	1.8	上下両端部を欠損
F4	S13 5層	第20図 PL.44	鏃	6.0	1.7	1.2	15.2	上半部を折り返して整形
F5	S13 焼土中	第20図 PL.45	不明鉄器片	2.80	1.2	0.7	1.4	下半部を折り曲げる
F6	S14 埋土	第21図 PL.45	棒状鉄製品	2.6	0.8	0.7	2.4	上下両端部を欠損
F7	S14 54層	第21図 PL.45	不明鉄器片	2.1	2.1	1.0	4.7	
F8	S14 57層	第21図 PL.45	不明鉄器片	2.4	1.7	0.3	7.8	上下両端部を欠損
F9	S14 46層	第21図 PL.45	不明鉄器片	1.8	1.2	0.9	2.0	上下両端部を欠損
F10	S15 埋土	第26図 PL.44	鏃	11.0	1.8	1.9	31.5	板状素材を折り曲げて棒状に整形、下端部を欠損
F11	S15 床直	第26図 PL.45	鏃	4.2	1.2	0.8	3.7	木質が一部残存
F12	S15 床直	第26図 PL.44	棒状鉄製品	4.6	1.1	1.0	9.2	下半部を欠損
F13	S16 3層	第30図 PL.46	ヤリガンナ	2.7	2.0	0.7	3.8	先端部、下端部を欠損
F14	S16 3層	第30図 PL.46	鏃	3.5	2.8	1.3	13.4	左右両側面を折り曲げて整形
F15	S16 3層	第30図 PL.46	棒状鉄製品	4.0	0.6	0.5	2.8	上半部を欠損
F16	S16 3層	第30図 PL.47	棒状鉄製品	3.7	0.8	0.8	2.4	上下両端部を欠損
F17	S16 3層	第30図 PL.46	棒状鉄製品	3.9	1.5	1.2	7.6	
F18	S16 3層	第30図 PL.46	不明鉄器片	3.3	2.0	0.8	5.2	
F19	S16 3層	第30図 PL.47	不明鉄器片	1.9	2.0	0.4	3.2	
F20	S18 床直	第41図 PL.46	ヘラ状鉄器	4.0	1.2	0.9	5.6	上端部を欠損、一部木質が残存
F21	S18 3層	第41図 PL.46	不明鉄器片	3.6	1.1	0.7	4.1	
F22	S18 3層	第41図 PL.47	不明鉄器片	1.4	1.9	1.0	3.9	
F23	S18 埋土	第41図 PL.46	板状鉄製品	3.5	2.2	1.5	14.6	
F24	S18 7層	第41図 PL.47	棒状鉄製品	2.1	0.8	0.4	1.5	下端部欠損。木質が一部残存
F25	S18 7層	第41図 PL.46	不明鉄器片	5.2	2.3	1.1	7.8	
F26	S19 埋土	第44図 PL.47	不明鉄器片	2.2	1.7	0.7	4.9	
F27	S110 4層	第48図	棒状鉄製品	3.9	1.1	0.7	7.8	